# 令和4年度大学教育再生戦略推進費
# 「大学の世界展開力強化事業」 計画調書
## ～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～

[基本情報] （主な交流先：英国・インド・オーストラリア）

| | | |
|---|---|---|
| 1. | 大学名（○が代表申請大学） | 千葉大学 |
| 2. | 機関番号 | 代表申請大学 12501 |
| 3. | 主たる交流先の相手国 | インド、オーストラリア、英国 |
| 4. | 事業者（大学の設置者） | ふりがな なかやま としのり<br>（氏名） 中山 俊憲 （所属・職名） 学長 |
| 5. | 申請者（大学の学長） | ふりがな なかやま としのり<br>（氏名） 中山 俊憲 |
| 6. | 事業責任者 | ふりがな すわ さゆり<br>（氏名） 諏訪 さゆり （所属・職名） 看護学研究院長 |
| 7. | 事業名 | 【和文】<br>グローバル地域ケアIPEプラス創生人材の育成 （GRIP Program）<br>【英文】<br>Global & Regional Interprofessional Education Plus Program （GRIP Program） |
| 8. | 取組学部・研究科等名（必要に応じ[ ]書きで課程区分を記入。複数の部局で合わせて取組を形成する場合は、全ての部局名を記入。大学全体の場合は全学と記入の上[ ]書きで全ての部局名を記入。） | 学問分野：○ 人社系 ○ 理工系 ○ 農学系 ○ 医歯薬系 ○ 看護・医療系 ◉ 全学 ○ その他<br>実施対象（学部・大学院）：○ 学部 ○ 大学院 ◉ 学部及び大学院<br>全学部〔看護学部、医学部、薬学部、工学部、教育学部、園芸学部、国際教養学部、文学部、法政経学部、理学部〕<br>全大学院〔看護学研究科、医学薬学府、園芸学研究科、融合理工学府、教育学研究科、人文公共学府、大学院総合国際学位プログラム、専門法務研究科〕 |

### 9. 海外相手大学

| | 国名 | 大学名(日本語) | 大学名(英語) | 部局名 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | インド | シンビオシス国際大学 | Symbiosis International | 看護学部、医学部、工学部 |
| 2 | オーストラリア | モナシュ大学 | Monash University | 看護学部、医学部、保健学部 |
| 3 | イギリス | レスター大学 | University of Leicester | 看護学部、医学部 |
| 4 | | | | |
| 5 | | | | |
| 6 | | | | |
| 7 | | | | |
| 8 | | | | |
| 9 | | | | |
| 10 | | | | |

### 10. 連携して事業を行う機関（国内連携大学等）

| | 大学等名 | 取組学部・研究科等名 | | 大学等名 | 取組学部・研究科等名 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | | 4 | | |
| 2 | | | 5 | | |
| 3 | | | 6 | | |

## 11.「学校教育法施行規則」第172条の2第1項において「公表するものとする」とされた教育研究活動等の状況について、公表しているHPのURL

（千葉大学）
https://www.chiba-u.ac.jp/general/disclosure/teaching/index.html

## 12. 本事業経費

（単位：千円） ※千円未満は切り捨て

| 年度 | | 2022年度 | 2023年度 | 2024年度 | 2025年度 | 2026年度 | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 事業規模（総事業費） | | **22,000** | **22,000** | **22,000** | **22,000** | **22,000** | **110,000** |
| 内訳 | 補助金申請額 | 20,000 | 18,000 | 16,200 | 14,580 | 13,122 | **81,902** |
| | 大学負担額 | 2,000 | 4,000 | 5,800 | 7,420 | 8,878 | **28,098** |

## 13. 本事業事務総括者部課の連絡先

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 部課名 | | | 所在地 | |
| 責任者 | ふりがな<br>（氏名） | | （所属・職名） | |
| 担当者 | ふりがな<br>（氏名） | | （所属・職名） | |
| | 電話番号 | | 緊急連絡先 | |
| | e-mail（主） | | e-mail（副） | |

質の保証を伴った交流プログラムの目的と内容【1ページ以内】

① 交流プログラムの目的・概要等

【交流プログラムの目的及び概要等】

グローバル地域ケアIPEプラス（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program GRIP） の目的は、SDGsの開発目標３「すべての人に健康と福祉を」を実現し、WHOが提唱するUniversal Health Coverage「全ての人が適切な予防、治療、リハビリ等の保健医療サービスを、支払い可能な費用で受けられる状態」の推進のために、地域ケアを創生する人材を育成することである。その人材とは、世界中どこにおいても文化的謙虚さに基づいた異文化対応能力を基盤として、多様な専門職とともにケアに関わる社会課題に取り組み、現場での最適解を導き出すべきものであり、生命科学に限らず、広く多様な専門の人材、エンジニアから行政官まで文理を問わず対象となる。このようなプログラムは**世界のどこにもなく、世界初のプログラムとして実施する**ものである。千葉大学では2007年から日本では初めて医療系学部を横断した「専門職連携教育プログラム-亥鼻IPE」を15年間、必修科目として推進している。この専門職連携教育を、全学に発展させ、日本以外の国や地域の課題に対応できる専門職業人材を育成する。本事業では、「地域特有の健康課題」に対して、専門領域の異なる学生がインター・プロフェッショナルかつインター・ナショナルに協働して取り組み解決方策を提案する地域対応型の人材を、専門を跨いだサービス・ラーニングにより育成するものである。

本事業の特徴は、以下の３つである。

**（１）医療系学部にとどまらず地域ケア創生に関わる全学部および全大学院が参加し、国際的な「地域ケア創生ネットワーク」を構築する**

**（２）IPEを基盤としたソーシャルラーニングにおける専門領域の異なる学生による相互の知識提供で、地域ケアのサービスを構築し実施**

**（３）千葉大学がCOIL-JUSUとグローバルIPE（現地交流型）を組み合わせ、継続的アクティブラーニングで、学習の相乗効果を得る**

本事業で開発する能力は、**専門職連携実践能力―Interprofessional Competencyと、社会課題解決能力―Social Issue Solution**であり、この二つは**文化的対応能力及び文化的謙虚さ―Cultural Competency and Cultural Humilityに立脚した具体的な実践能力**である。この能力を学部、修士、博士と段階的に獲得できるようにプログラムを構築し、新たな専門職教育モデルとしての普及を以下の２段階で実施する。第一に、オンデマンド教材の開発とJV-Campusでの開講、教材評価、教育ロジスティクス評価を実施する。千葉大学とシンビオシス国際大学（インド）において現地フィールドスタディを実施し、**バーチャルワークショップの開催、社会課題に関する学生のケーススタディをオンデマンド教材に追加**する。これらにより、**インタープロフェッショナル・サービスラーニング（ISL）の初期モデルを構築**し、さらに上位の修士・博士のプログラムを開発する。第二段階では、**モデルの横展開普及として、国内の大学や連携校以外の大学（札幌医科大学、台北医学大学など）に展開し実施**する。社会課題への対応について、事後評価を実施、さらにアウトカム評価を蓄積することで、専門職連携教育の効果評価に貢献する。

【養成する人材像】

社会課題の解決はまさに**多様な職種間の連携協働および国際的な比較と考察、資源を創造する柔軟な発想が必要**とされる。本事業で養成する人材像は、**Universal Health Coverage推進のために地域ケアを創生できる専門職**である。

具体的には、**こどもたちの健康状態の改善のためのアクションを取ることができる、その国に必要な医療機器、介護機器を開発できる、健康的な環境を考慮した地域開発ができる、健康資源へのアクセシビリティを改善する、健康習慣の獲得のための教育ができる、高齢者のポリファーマシーの改善に取り組むことができる**など、どの国、どの地域であっても、自国でも他の国でも健康関連の課題に他の専門職とともに取り組み、文化的対応能力及び文化的謙虚さを基盤として、現場での最適解を導き出すことができる自律した組織人を養成する。そのため、本事業は千葉大学全体を対象として**多様な専門の人材をこのような、グローバル地域ケアIPEプラス（GRIP）型人材**として育成する。

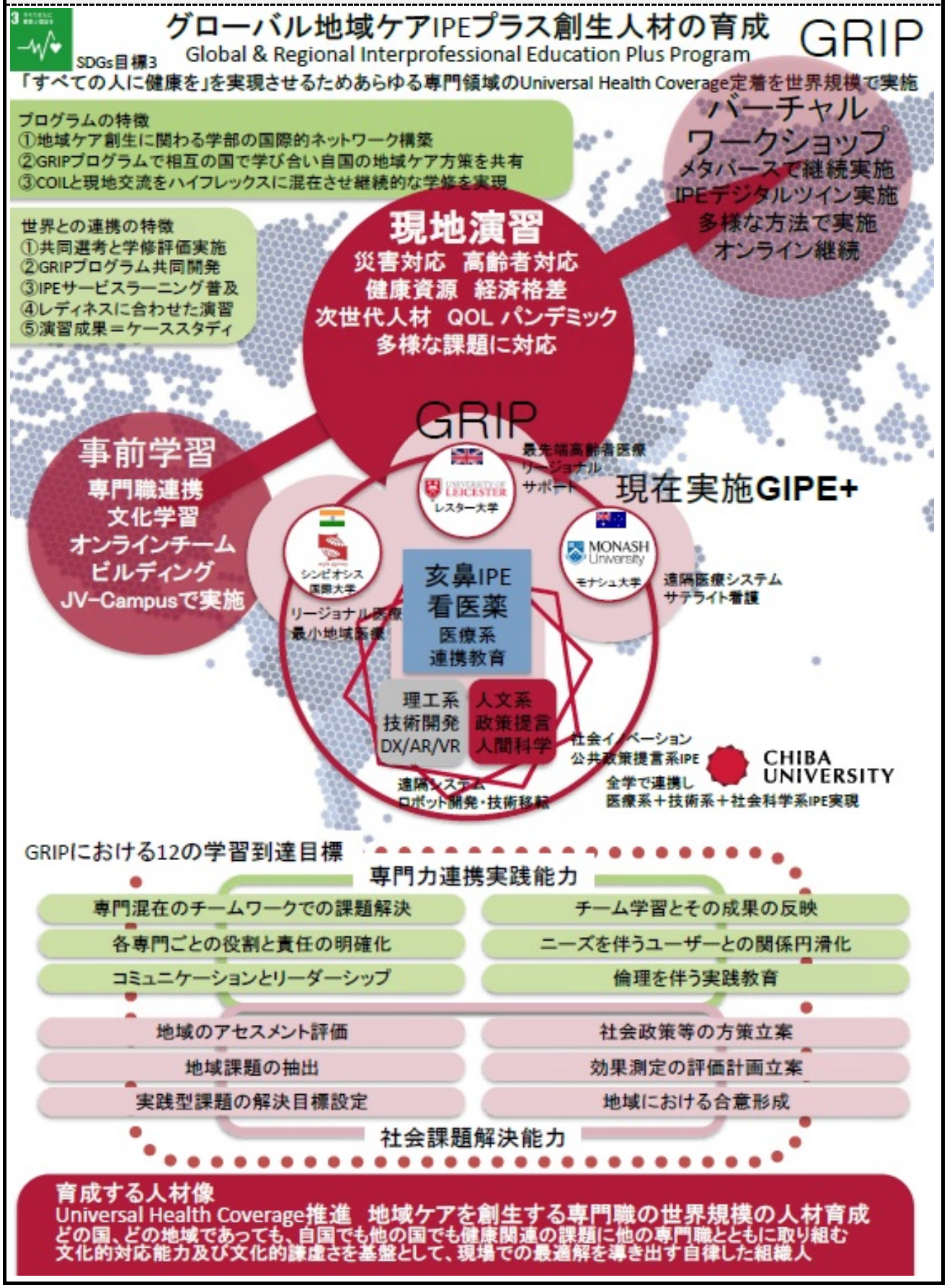
【本事業で計画している交流学生数】各年度の派遣及び受入合計人数（交流期間、単位の取得の有無は問わない）

（単位：人）

| 2022年度 | | 2023年度 | | 2024年度 | | 2025年度 | | 2026年度 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 |
| 10 | 10 | 15 | 15 | 20 | 20 | 30 | 30 | 40 | 40 |

（大学名：　千葉大学　）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア　）

② 事業の概念図 【1ページ以内】




（大学名： 千葉大学 ）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア ）

## ③　国内大学等の連携図　【1ページ以内】

なし

（大学名：　千葉大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

④-1　交流プログラムの内容　【3ページ以内】

【実績・準備状況】

看護系のIPEおよびグローバル展開は、以下の４つにまとめられる。これらは、本事業の重要なビジョンでもある、SDGs目標３「すべての人に健康と福祉を」を実現し、WHOのUniversal Health Coverageに即し、かつ看護学の国際基準に則ったIPEを開発発展させてきた。これらにより、国際的通用性を備えかつ質の高い教育を提供する準備はできており、これまでの、園芸学、工学、国際教養学に続き、千葉大学のグローバル教育展開を新たな側面から強化することに貢献する。

**①医療系IPEの先駆者としての看護学研究院附属専門職連携教育研究センター（IPERC）**

IPERCは2015年設置以降、亥鼻IPEという世界から見ても先進的な専門職連携教育カリキュラムの開発・運営・評価・改善の拠点として機能し、千葉大学医療系学部延べ1000人の必修プログラムを展開し、**国家資格取得前のIPEに関しては医学部のIPE必修化、診療参加型IPEプログラムの開発などグローバルスタンダードIPEを確実に発展させてきた。またCOVID-19パンデミックの中にあっても、ICTベースにIPEをすべて載せ替え、IPEを止めることなく実施するノウハウを獲得した。**現在は卒業生が多く入職する大学病院での新入職員対象IPEと連動させ、継続的なIPEカリキュラムを発展させている。また日本の医療系学部のコアカリキュラムにIPEが組み込まれつつあることから、IPEカリキュラム開発研修を2016年より全国のIPEをスタートさせようとする大学教員に提供し、コンサルテーションに応じてきたことで、全国のIPE導入大学との強いネットワークを有している。

**②日本のIPE継続教育拠点としてのIPERC**

**IPERCでは、看護学研究科の博士前期課程科目として、専門職連携実践論、専門職連携教育論、災害時専門職連携実践論を開講し、全学開放科目としている。**大学院においてこれだけの専門職連携科目を有しているのは千葉大学だけである。また医療介護福祉系専門職に実践者向けの専門職連携教育の体系的なプログラムを各種開発し、毎年250人程度の参加者を得ている。このようにIPERCは日本のIPE継続教育拠点として発展し、多様な継続教育IPEプログラムを有している。

**③国内IPE実施大学との連携**

特に今回は国内連携大学を設定しないが、IPERCはこれまで全国の医療系大学のIPEと連携しつつIPEの普及に努めてきた。なかでも札幌医科大学、群馬大学は、日本のIPEファウンダーとして千葉大学とともに2006年よりカリキュラム開発評価などをともに実施し協働してきた。札幌医科大学はルーラルエリアでの地域医療ベースIPEでは先駆的なカリキュラムを有しており、北海道の様々な地域でソーシャルラーニングを含んだIPEを展開している。群馬大学はWHOのIPEブランチを有しており、毎年アジアの大学を対象としたIPEトレーニングコースを展開し、千葉大学IPERCも例年これに千葉大学IPEプログラムを提供している。

**④海外IPE実施大学との連携によるグローバルIPE開発**

IPERCはグローバルIPEの開発拠点として、2015年開設当時からイギリス（レスター大学）、ドイツ（ライプチヒ大学）、オーストラリア（モナシュ大学、グリフィス大学、シドニー大学）、台湾（台北医学大学）、韓国（インジェ大学）、インドネシア（インドネシア大学、ガジャマダ大学）、香港（香港大学）、カナダ（トロント大学、オタワ大学）、の各大学とのエクスチェンジIPEを準備・開発・実施してきた。また看護学部において、COILプログラムによりシンシナティ大学およびアラバマ大学と協働してきたが、現在シンシナティ大学とのグローバルIPE・COILに発展させる準備を行っている。加えて、インドのシンビオシス国際大学とのUniversal Health Coverage を学ぶ交流プログラムを開発してきたが、2020年からはENGINE（千葉大学における全員留学等を柱とするグローバル人材育成プラン）科目として、遠隔同時双方向プログラムに移行させて実施している。

以上が現在の取り組み状況である。

【計画内容】
■世界初のプログラムを６つの観点で実現
　本事業GRIP（Global & Regional Interprofessional Education Plus）は、学部学生、修士学生（医学部薬学部は5年生および6年生）、博士学生を対象として、大学全体に看護学の理念を展開し、SDGsの開発目標３「すべての人に健康と福祉を」を実施できる人材をあらゆる専門領域で育成するものである。そのために、本事業では、以下の６つの具体的内容を実施していく。
**１）IPEとソーシャルラーニングをグローバル＆ローカルに推進する世界初のプログラム**
　**IPEは、専門家や知識の利用者と向き合うことで、現在の実践やパラダイムに疑問を投げかけることができる学習である。**このIPEに、同じ国の異なる専門職の間だけでなく、異なる伝統、教育システム、言語を持つ国同士のコミュニケーションを促進し、インターカルチュラルなプログラムを構築する。このような新しいIPEの取り組みは、世界の看護ケア・アプローチの多様性に対処することができ、実践やコンピテンシーが均等性ではない、というユニークさがある。このような国際的IPEコースは世界に存在していない。本事業は、世界をリードするプログラムとして構築する。
**２）副専攻「グローバル地域ケアIPEプラス（GRIP）」の設置**
　**本事業では、大学院グローバルプログラムである大学院国際実践教育に、新たに副専攻プログラムGRIPを全学履修可能として設置する。**本副専攻は、修士課程および博士課程を対象とし、亥鼻IPE科目履修済みの学部学生（看護学部生４年生、医学部、薬学部５年生、工学部・医工学４年生、および連携大学）も受講可能とし、プログラムの３ポリシーを明確にし、受講させることで、人材を育成する。連携大学が承認すれば、海外の連携大学の学生も、千葉大学の副専攻の学位を取得できる。将来的には、海外連携大学での設置も促進してもらい、世界共通のマイナープログラムの設置を目指す。
**３）健康関連社会課題の世界共通化と地域特性対応の双方型解決の実践**
　**GRIPの専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Social Learning　ISL ２単位)は、事前学習、現地演習、バーチャル・ワークショップで構成する。**
(i)事前学習は基本的にオンラインでチームビルディングとケース・シナリオを用いたシミュレーションにより社会課題を解決する。
(ii)現地演習では、多様な文化的・学際的背景をもつ学生が協働して、現地の問題解決に専門職連携を基盤にして取り組む。
(iii)バーチャル・ワークショップでは、社会課題解決に向け取り組んだチームにより、学習成果の具現化とその地域への実装、自他国への移転可能性の検証などをまとめる。最終課題は社会課題解決の成果は、ケース・スタディ・シナリオとして蓄積し、次年度以降の教材として利用する。
**４）医療系学生が履修可能なインテンシブ・イシュー・プログラムで実施**
　本プログラムは、全学で実施するものであるが、看護系（医療系）が履修していなければ、グループワークの効果が薄れることは間違いない。**看護系（医療系）のカリキュラムは、過密で長期間の留学などが難しいことから、これらの専攻の学生がGRIPの履修をしやすい、インテンシブ・イシュー・プログラムで実施する。**これは、すでに国際教養学部が知識集約型教育で実施しているモデルを活用し実現する。
**５）カリキュラム・マップによる学習到達目標の明確化と質保証**
　プログラムの３ポリシーを明確にするとともに、**設置する授業科目のカリキュラム・マップを学部・大学院ともに設置、その中で留学における学習到達目標も明確にし、学生の興味と準備状態に応じて、段階的に学習到達目標をクリアできるようにする。**海外の大学にも同様にこのプログラムとポリシーを提供し、共同で実施する。
**６）ハイフレックスによる授業運営**
　GRIP科目のうち、専門職間社会課題解決演習（ISL）以外の**６科目は、オンラインでの学修を可能とし、世界のどこからでも受講可能な環境を作る。**千葉大学では、スマート・ラーニングでハイフレックス型の授業を展開している。**医・看護・薬・工の４学部、300名以上の専門職連携教育をオンライン同時双方向で、かつグループワーク（６人程度）で学習目標の達成までファシリテーションできる環境が整っている**ため、それを活用する。

■２フェーズでカリキュラムのレビューを実施しプログラムの質を保証
さらに本事業では、以上の実施計画を２つのフェーズで実現させる。
【PHASE １】―GRIPモデルの構築　（2022－2023年　中間評価まで）
初年度（2022年度）は、IPEオンデマンド教材開発を行い、JV-Campusに搭載する。現在すでにその一部となる高齢者ケアについては、すでにJV-Campusで公開している。このメディアを、千葉大学及びシンビオシス国際大学の学生に受講してもらい、教材評価を実施する。一方で、オンライン・チーム・ビルディング・プログラムを開発し、フィージビリティ評価を実施する。またフィールド・スタディの予備調査を行い、課題を選定する。これらを演習課題アーカイブとし、課題に取り組むためのテンプレートを作成する。さらに、2023年度には、インドと日本で現地演習プログラム開発し、フィールド・スタディをスタートさせる。さらにバーチャル・ワークショップを開催する。また、その成果としてフィールド・スタディをケース・スタディ・アーカイブとし、事前学習コンテンツとして利用する。
【PHASE ２】―GRIPモデルの世界普及　（2024―2026年　中間評価以降）
　JV-Campusを活用し、国内・海外の大学をリクルートする。一方で、これまで連携のある、札幌医科大学、群馬大学、ハノイ大学、台北医学大学、ライプチヒ大学、シンシナティ大学などの参加を促進する。これにより、ローカル・フィールドの拡張を行う。また毎年バーチャル・ワークショップを開催し、ケース教材のアーカイブを継続する。健康課題の取り組みプロジェクトのフォローアップ・スタディをスタートさせ、現地でのインパクト及びアウトカム評価の指標を明確にする。最終年度には、プロジェクト全体の最終評価を行い、共有する。

■本事業のプログラムに関する質保証
①GRIPプログラムに関する反転授業教材の蓄積と活用
　本事業の実施により、JV-Campus上に千葉大学提供のIPEコンテンツ、およびサービスラーニング教材を公開する。これを活用する大学教員および学生からの授業評価をもとに持続的に改善していく。
②GRIPプログラムの質保証　４能力の評価
　サービスラーニングを用いたグローバルIPEに関しては、その堅牢な学習者評価のツールおよび方法が確立していない。本事業を通して、「１．専門職連携実践能力」「２．文化的対応能力」「３．文化的謙虚さ」「４．健康課題解決能力」における自己評価と他者評価の項目を開発することで、学修者評価を適切に実施させる。
③副専攻学位、サーティフィケートの付与
　GRIPを大学院副専攻として設置し、大学が運営する履修管理および成績管理に基づいて受講させる。博士課程では、グローバルな演習の一つのプログラムとして位置付け、留学の一部とする。このように、正規科目及び副専攻と位置付けることにより受講管理・成績管理を厳格に実施する。

■本事業で学生に習得させる人材能力
　本事業では、学生には大きく２つの能力を修得させる、そして、それぞれに６つの目標があり、合計12の修得すべき能力の習得を目標とする。
**修得させる２つの能力とは、「A.専門職連携実践能力」および「B.社会課題解決能力」である。「A.専門職連携実践能力」は、「B.社会課題解決能力」の前提にある。**
「A.専門職連携実践能力」は、IPEでは生命科学に関する知識とその利用法に関するものである。これを全ての専門領域に拡張して目標とする。従って、これまでのIPEの目標をもとに、以下のような能力を設定する。
　もう一方の「B.社会課題解決能力」は、ソーシャル・ラーニングとしての能力であり、幅広い知識が必要となると共に、それを地域に還元できるような能力が必要となる。また社会課題を発見し、よく理解し、かつ持続的に継続できる解決方法も重要となる。即効性はあるが持続できないものはいずれ社会から排除されるため、SDGsの理念に沿った持続的な解決方法が本事業の能力でも求められる。
　一方で、**この２つに共通する具体的能力には、文化的対応能力および文化的謙虚さが含まれる。つまり、２つの知識、専門的な深い知識と、社会的な幅の広い知識が必要となり、それらを裏付けするための「文化的対応能力および文化的謙虚さ」が重要となる。**
これを学部と大学院に効果的に修得させるため、以下の学習到達を目標とする。
　**「A.専門職連携実践能力」における能力は、WHOが示す専門職連携教育をもとに、以下の６つをGRIP1-6として策定している。**

（GRIP1）専門混在のチームワークでの課題解決
（GRIP2）各専門ごとの役割と責任の明確化
（GRIP3）コミュニケーションとリーダーシップ
（GRIP4）チーム学習とその成果の反映
（GRIP5）ニーズを伴うユーザーとの関係円滑化
（GRIP6）倫理を伴う実践教育

である。
　次に**、「B.社会課題解決能力」における能力は、SDGｓの理念を参考にし、以下の６つをGRIP7-12として作成した。**

（GRIP7）地域のアセスメント評価
（GRIP8）地域課題の抽出
（GRIP9）実践型課題の解決目標設定
（GRIP10）社会政策菜等の方策立案
（GRIP11）効果測定の評価計画立案
（GRIP12）地域における合意形成

　上記の能力を獲得することを学習到達目標としている。
　以上のように、本プログラムでは、プログラムの実施により。グローバル＋ローカルな「グローバル地域ケアIPEプラス創生人材の育成」を実現する。

（大学名：　千葉大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

④-2　学生主体の国際交流プログラム　【1ページ以内】

【実績・準備状況】

千葉大学の「学生主体の国際交流プログラム」は、看護系のプログラムから始まっている。2010年に始まったグローバル・スタディ・プログラムは、最初に「高齢者の在宅介護のサービスの未来」を課題として、フィンランドのセイナヨキ応用科学大学で２週間のプログラムを実施したのが始まりである。この時は、看護、工学、園芸、教育、文、法政経の６学部から20名以上の学生が参加し、セイナヨキ応用科学大学の学生24名と合わせて50名規模のプログラムを実施した実績がある。以降、日本とフィンランドで隔年開催しており、日本でも４回以上実施している。近年では、COIL-JUSUで、アラバマ大学やシンシナティ大学との共同教育を実施しており、十分な実績がある。

一方で、千葉大学には、副専攻として大学院国際実践教育に８つの副専攻プログラムがある。国際実践教育は課題解決型のアクティブラーニングであり、海外学生との協働学習、複数の分野にまたがる混合型の専門教育を特徴とする。これらのプログラムはワークショップや正課外活動を含むため、その準備、運営、成果共有については千葉大学全体に経験知が蓄積されている。

また千葉大学の医療系３学部が存在する亥鼻キャンパスでは、海外学生の受け入れに関連したサポートや文化的適応支援を行う学生ボランテイア団体が活発に活動しているため、学生主体の交流経験の実績があり、準備状況は十分である。

【計画内容】

本事業は、基本的に全てが共同学習となっている。特に、専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Social Learning　ISL ２単位)は、千葉大学―海外大学―課題提供大学および国内大学と幾つもの大学が連携し、共同学習を実施する。このような中で、以下の２つを積極的に実施し、現地に行かなくても共同学習が可能なプログラムとして構築する。

①オンラインチームビルディングワークショップ

健康課題の解決に向けて現地演習を行うが、事前準備として、参加大学の異なる専攻の学生が興味のある演習課題に取り組む。演習課題は、医療施設と地域、都市部とへき地、ジェンダー、母子と高齢者など対極にある概念を含む課題として学生の興味に応じて選択する。国や専門領域を超えて取り組むチームを学生が主体となって構築していく活動を、教員がサポートしながら行うことができるように、アイスブレーク手法、チームの発展段階に応じたファシリテーションなどを共有しつつ学生チームの構築を促進し演習課題に取り組む目的目標を明確にし、具体的な行動目標を立案するまでをオンラインで行う。この学部学生のチームビルディングに修士および博士が入ることにより、お互いとともにお互いからお互いについて学ぶIPEのコアコンピテンシーを獲得することを期待する。

②メタバースを活用したバーチャルワークショップ

現地演習に取り組んだ後は、ワークショップでの共有に向け、メタバースでのプレゼンテーション準備の話し合い、プレゼンテーションの実施、各大学教員からのフィードバックののち、学びの共有を行う。最先端のSNSを学習に利用するとともに、ミラー社会での成功を現実世界に反映させる。

またこの際には、このプロジェクトの興味のある学生にもワークショップ参加を促し、次のプロジェクトのイメージをつかんでもらうとともに、フィールドへの理解を深める機会となることを期待する。将来的にはGRIPに関する学生と教員の実践報告の場として機能し、社会課題解決に関する実践知の集積プラットフォームとなることを期待する。

（大学名：　千葉大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

**④-3　オンライン（「JV-Campus」等）を活用したプログラム　【1ページ以内】**

【実績・準備状況】

本事業では、事前、事後の学習にオンラインを用いたオンライン・サンドイッチプログラムを実施する。中でも、本事業の事前学習で用いるプログラムは、すでにJV-Campusに「入門：看護学１」千葉大学の看護学の概要や地域ケア、認知症などの課題を中心に概説するプログラムとして7つのメディアを公開している。

また、これ以外にも、以下の２つのコンテンツの提供が可能であり、準備状況は十分である。

①オンラインIPEコンテンツ-ICTベースIPE

IPERCは2015年設置以降、亥鼻IPEという世界から見ても先進的な専門職連携教育カリキュラムを開発・運営・評価・改善の拠点として機能し、千葉大学医療系学部延べ1000人の必修プログラムを展開し、国家資格取得前のIPEに関しては医学部のIPE必修化、診療参加型IPEプログラムの開発などグローバルスタンダードIPEを確実に発展させてきた。またCOVID-19パンデミックの中にあっても、ICTベースにIPEをすべて載せ替え、IPEを止めることなくオンラインで実施してきた。そのためおよそ20以上の動画、ワークシートなどのコンテンツをすでに保有し毎年改訂している。そのため、IPEコンテンツに関しては英訳することでJV-Campus搭載が可能な状態である。

②多様な大学院IPEコンテンツ-災害時専門職連携など

IPERCでは、看護学研究科の博士前期課程科目として、専門職連携実践論、専門職連携教育論、災害時専門職連携実践論を開講し、全学開放科目としている。また医療介護福祉系専門職に実践者向けの専門職連携教育の体系的なプログラムを各種開発し、毎年250人程度の参加者を得ている。このようにIPERCは日本のIPE継続教育拠点として発展し、多様な継続教育IPEプログラムを有している。そのためGRIPに適したパッケージとして構築することが可能である。

【計画内容】

GRIPでは、全体の実施計画と同様に、中間評価までと中間評価後の２つのフェーズでオンラインプログラムを構築し、JV-Campusで公開し、事前学習で利用する。本事業では、JV-Campusをプログラムの一部として利用するものである。

１）PHASE1（2022-2023）

事前課題コンテンツをJV-Campusに公開し、連携する大学の教員および学生から評価を受け洗練する。事前課題コンテンツは、以下の内容とする。①専門職連携学習および演習②文化的対応能力学習および社会課題解決学習、①②のコンテンツを海外連携大学とともに洗練しパッケージ化する。JV-Campus搭載コンテンツをパッケージ化する際に、連携校であるシンビオシス国際大学、レスター大学、モナシュ大学からもコンテンツを提供してもらい、ワークシートおよび反転授業資料を拡充する。

２）PHASE2（2024-2026）

上記①②のパッケージを活用し現地演習の準備性を高める。また現地演習で得られた社会課題解決Caseを難易度別にリスト化し、事前課題コンテンツに加える。これにより学生のレディネスに応じた演習準備を可能とする。PHASE2での事前学習、現地演習、バーチャルワークショップのサイクルに連携大学以外の大学の学生が参加できるようにJV-Campusで効果的に周知する。また大学院生のリクルートに使用できるようなGRIP動画コンテンツを、海外連携大学とともに作成する。

予定しているコンテンツの内容は以下の通りである。

①専門職連携学習コンテンツ

アイスブレーク、チームワークとチームビルディング、専門職の役割・責任の理解の方法、コミュニケーションとリーダーシップ、リフレクションとフィードバック、倫理的実践、カンファレンス（会議）での意思決定、対立の解決と交渉、など

②文化的対応能力学習と社会課題解決学習コンテンツ

現地演習地域の文化、風習、医療福祉制度、地区診断、ヘルスプロモーションと社会的決定要因、プロジェクトマネジメント、文化的謙虚さ、など

③社会課題とその解決方法のケース

７つのプログラム、(1)専門職連携基礎、(2)専門職連携実践１、(3)専門職連携実践２、(4)Cultural Competency and Cultural Humanity、(5)社会課題解決基礎、(6)社会課題解決応用、(7)専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Social Learning　ISL）を実施し、オンライン化する。

（大学名：　千葉大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

⑤　質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成　【４ページ以内】

【実績・準備状況】

千葉大学は、2020年より、ENGINEプランをスタートさせ、学生全員（学部・大学院）が在学中に、一度以上の海外留学することを卒業・修了の要件としている。一方で、これまでに獲得した大学の世界展開力強化事業を学内で継続的な仕組みとするため、質の保証を伴い維持する方法として副専攻学位プログラム「大学院国際実践教育」を設置している。さらには、どこでも学習できる「スマート・ラーニング」の推進を2019年度より行なっている。これは、留学の推進を積極的に展開する過程で生まれた、留学先でも学習できる環境を提供するもので、メディア学習と双方向通信学習及びチュートリアルの全てを利用した学習プログラムであり、多くの授業がこのような形態で提供できるようになっている。また、国内で唯一のターム制（６ターム制）を導入しており、１ターム（２ヶ月）完結の科目設定を基本にするなど、教育の質的改善を図るとともに、ギャップタームを創出している。さらにこの６ターム制度は、新学期の開始時期が異なるさまざまな海外大学の学生が、いつでも留学できるアカデミック・カレンダーとなっている。

一方、本事業の全体運営を担う看護学部・大学院看護学研究科は、COIL-JUSUをシンシナティ大学およびアラバマ大学と一緒に展開しており、現在グローバルIPE-COILを実施している。

さらに、これまでに述べてきた計画概要におけるPHASE1から連携してプログラムを開発するシンビオシス国際大学（インド）とは、専門職連携教育を検討している段階である。看護学部・大学院看護学研究科は、看護学部のGlobal Health and Nursing Ⅱ科目における留学プログラムを共同開発し、2022年には4年目を迎える。本プログラムは、現地交流を含んだ文化・医療制度の理解と健康課題のアセスメントに関するプログラムであり、GRIPのプロトタイプとなっている。オーストラリアでは2010年より国レベルでIPEが推進され、現在Australia National Council Interprofessional Education in Healthの設立準備が進んでいる。またオーストラリア・ニュージーランド医療専門教育者協会（ANZAHPE)では学習モジュールなどのリソースやコンテンツのリポジトリを構築している。そのためモナシュ大学、グリフィス大学、シドニー大学はすでにIPEの資源へのアクセスが標準化されている。一方で文化的学習、社会課題解決のためのコンテンツについては未開発であることも指摘されており、本事業はオーストラリアの未開発部分を補完できる可能性がある。また、2012年にはモナシュ大学（オーストラリア）は千葉大学と大学間協定を締結しており、さらに2022年には海外留学生向けにInternational Study Grants 2022として一人85万円の奨学金が準備されている。

英国にはCAIPE（Center for the Advancement of Interprofessional Education)という国際的な専門職連携推進のための非営利団体があり、専門職連携教育発祥の地である。またCAIPEはAll together better health(ATBH)という国際ネットワークを構築しており、世界の専門職連携教育に関する学術会議を統括している。千葉大学も亥鼻IPE初期にCAIPEにコンサルテーションを依頼し、その際にレスター大学（英国）で行われていたIPEストランドモデルを基礎に亥鼻IPEを作り上げてきた。レスター大学のIPE担当者はCAIPEの理事でもあり、英国の専門職連携教育の質の改善に大きく貢献している。

PHASE２で参加を呼び掛ける大学のなかで、専門職連携教育プログラムを有している米国はTriple Aimと呼ばれる患者ケアの向上、国民の健康状態の改善とともに医療費の削減のために専門職連携教育が推進され、IPECと呼ばれるコアコンピテンシーをエキスパートパネルにより確立し、コアカリキュラムに反映させ、国レベルの専門職連携教育実践の拠点を作っている。シンシナティ大学はこの流れを受けてIPE運営委員会を設立している。

以上のように準備状況は十分である。

【計画内容】

本事業では、学部、修士、博士の学生を対象とし、既存の留学科目を活用した履修管理及び単位認定を行うとともに、大学院に「Global & Regional Interprofessional Education Plus」を置き、副専攻の学位を付与する。また既存科目を活用し単位を付与することで、学部から博士までどのレベルの学生でもGRIPに参加しやすくするとともに、その準備状態に応じた学修を保証する。

■質保証における４つの枠組み

本事業の質保証で重要な（１）GRIP参加学生の選抜、（２）レベル別の学習到達度目標の設定、（３）GRIPの履修および単位認定、(４)GRIPの質保証の拡張、の４つについて以下のように推進する。

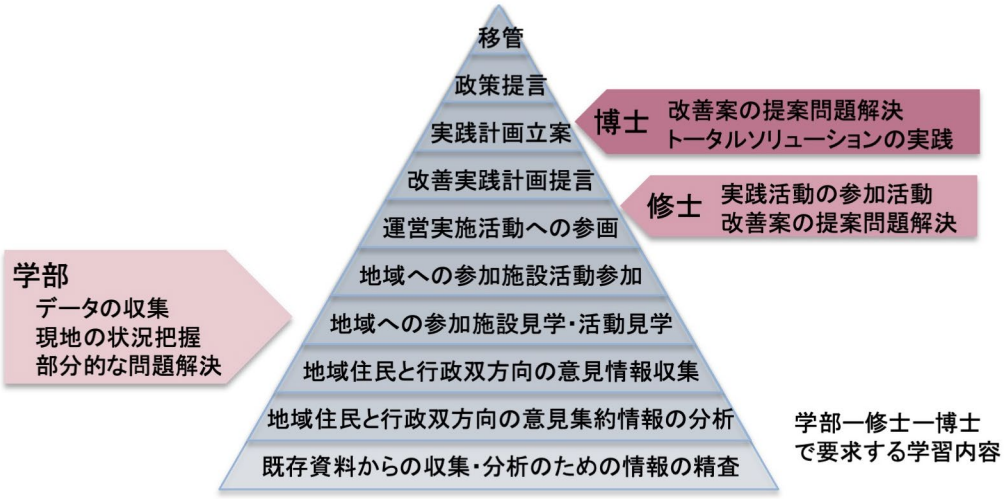
（１）GRIP参加学生の選抜

全学に向けて、GRIPの説明会を行い、参加学生の募集を行う。また同時に説明動画を作成し、連携大学と共有する。受講学生の選考基準、共通選考要件を作成しそれぞれの大学で選考を実施する。またプログラムの稼働に伴い、選考要件の評価会議を設定し、選考方法および要件の改善を実施する。

（２）レベル別の学習到達度目標の設定

本事業は、全学では大学院を対象に、IPE受講済み学生は学部の３年生以上を対象にする。したがって、受講学生は学部、修士、博士とレベルが異なっている。これらの学生が単一の成果を上げるのではなく、それぞれの授業においても、各自のレベルにおいて課題に対してどのような提言を成果とするかを図１のように設定し、レベル別の学習到達度目標で学習の質を担保する。後述する12の学習到達目標とともにレベル別の学習到達度目標で学修成果を管理する。

図１レベル別の学習到達度目標




（３）GRIPの履修および単位認定
副専攻GRIPの科目および概要を表１に示す。

表１　副専攻　グローバル地域ケアIPEプラス
(Global & Regional Interprofessional Education Plus GRIP)科目

| NO | 科目 | 単位 | 選択/必修 | 概要 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 専門職連携基礎 | 1 | 選択 | IPEの起源と理論的背景、必要性をSDGsとの関連から論述し、基本的な理論から専門職連携実践活動を学ぶ |
| 2 | 専門職連携実践１ | 1 | 選択 | 専門職連携実践活動に必要な役割と責任、コミュニケーション、患者利用者住民との関係構築を学ぶ |
| 3 | 専門職連携実践２ | 1 | 選択 | 利用者住民へのサービス品質向上に向けた専門職連携実践のためのリーダーシップとメンバーシップと倫理的実践を学ぶ |
| 4 | Cultural Competency and Cultural Humility | 1 | 選択 | 異なる伝統、教育システム、言語を持つ国同士のコミュニケーションを促進するインターカルチュラルな実践を学ぶ |
| 5 | 社会課題解決基礎 | 1 | 選択 | 社会課題の解決に必要な地域アセスメント、課題抽出、目標設定方策立案、評価計画立案の一連の流れをシミュレーションシナリオを用いて学ぶ |
| 6 | 社会課題解決応用 | 1 | 選択 | 社会課題の解決に必要なステークホルダーとの合意形成と対立の解決方法、コンサルテーションの実際をシミュレーションシナリオを用いて学ぶ |
| 7 | 専門職間社会課題解決演習 (Interprofessional Social Learning ) | 2 | 必修 | 事前学習、現地演習、バーチャルワークショップで構成する（詳細後述） |

この７つの科目の中で、一番重要なのが、専門職間社会課題解決演習（ISL）である。この演習は、連携する大学、対象とする地域によってそのテーマが異なっていく。

〇専門職間社会課題解決演習（ISL）テーマ案

学部、博士前期課程、後期課程の学生が、ともに学びお互いから学び合えるように、連携大学が保有するフィールドを共有し、学生が選択したテーマにふさわしいフィールドを選択できるよう支援することを目標とする。教員は学生のレディネスに合わせた学習支援を行う。そのために、社会課題解決能力のラダーを開発し、これをもとに学修者評価のための共通ルーブリックを作成し、参加大学が共通の評価基準をもって学修者評価ができるようにする。社会課題解決演習（現地演習）のテーマの例を表２に示す。それとともに、どのように全学の学生の専門領域を巻き込みながら課題を解決するかについて、想定される専門領域について括弧内に示す。

表２　専門職間社会課題解決演習（ISL)テーマ

| NO | テーマ案 | 概要 | 期待するアウトカム |
|---|---|---|---|
| 1 | 災害被災者の健康 | 災害の局面に応じた被災者の健康課題を取り上げ解決方略を提案する | 住民教育による誰一人取り残さない社会の実現。そのための地域災害対応能力の向上、避難所環境向上のためのテクノロジー開発、被災地域の緑化、復興に向けた街づくり |
| 2 | 医療資源へのアクセシビリティ | 医療資源の偏在と不足に関連した健康課題を取り上げ解決方略を提案する | 遠隔医療テクノロジーの実装提案、伝統的代替医療と調和したプライマリヘルスケアシステムの補完、急性期病院のケアの質の向上、長期ケア施設での大往生を支えるテクノロジーとケアモデル提案 |
| 3 | 認知症者とともに作る介護 | 認知症者の暮らしのなかの健康課題を取り上げ解決方略を提案する | 認知症者への尊厳あるケア提供を支援する介護ロボット開発、ケアラー支援テクノロジー開発、認知症者のWellBeingを促進する環境提案 |
| 4 | パンデミックと文化 | パンデミック下の文化的背景および制度に依存した健康課題を取り上げ解決方略を提案する | 隔離による孤独を解消するテクノロジー提案、ワクチン忌避への政策提言、国民への情報提供の在り方提言 |
| 5 | ホームレスネスと社会 | 文化的文脈から見たホームレスネスが引き起こす健康課題を取り上げ解決方略を提案する | 犯罪者のリハビリテーションプログラム提案、シェルター運営へのテクノロジーの応用、長期的支援のための政策提案 |

**◇テーマNo1　「災害被災者の健康」**
受講予定学生　＜看護・医・工・園芸・公共政策・総合国際＞
　本テーマでは、災害における被災者の健康に関する課題を取り上げ、その具体的解決方法を提案する。住民参画型のインクルーシブな活動により、誰一人取り残さない社会を実現する。そのために、どのような避難所の環境が必要なのか（建築・都市環境）、必要な社会テクノロジーは何か（ロボット）、さらには、被災地の緑化再生によるグリーン・ヒーリングの応用（園芸・緑化）、復興に向けた新たな街を作るサービスやデザインなど（ランドスケープ・デザイン）、多岐にわたる戦略を構築し実現する。日本やマレーシアの地震や津波、タイやインドの水害などが対象となる。
**◇テーマNo2　「医療資源へのアクセシビリティ」**
受講予定学生　＜看護・医・薬・理・工・公共政策・総合国際＞
　本テーマでは、医療資源の偏在から発生する課題を取り上げ、その解決法について提案するものである。遠隔医療（医・IoT・情報・AI）とそのテクノロジー（工・公共政策）を実装することによる問題を政策提言し、代替医療を実現する。さらに、さまざまな場面におけるケアを実現し、医療によりQOL（看護・薬・機会・サービス）を向上させることが可能な政策提言とその実行を実践する。
**◇テーマNo3　「認知症者とともに作る介護」**
受講予定学生　＜看護・医・薬・理・工・文・法政経・人文・公共政策・総合国際＞
　認知症者とどのように生活をともにし、尊厳あるケアを提供できるかを社会が考え、社会で提供する（文・法政経・人文・公共政策）。認知症者だけではなく、ケアラーを支援するテクノロジーの開発も重要な課題として取り上げる（看護・医・理・工）。日本などはヤング・ケアラーの課題などがこれに当たるが、国や地域によって、ケアラーも異なる。このような課題を多様な専門により解決する（看護・医・薬・理・工・文・法政経・人文・公共政策）。
**◇テーマNo4　「パンデミックと文化」**
受講予定学生　＜看護・医・薬・理・工・公共政策・地方行政・メディア＞
　今回の新型コロナウィルスのようなパンデミック下において、精神的な健康課題を文化的な背景をもとに健康課題を解決する（看護・地方行政・メディア・総合国際）。孤立、隔離などメンタルストレスに直結するような環境を最先端技術により解決し、新しい形でのコミュニティの形成により、解決する（看護・工・公共政策・地方行政・メディア・総合国際）。このような、パンデミック下における情報の提示から、コミュニティの形成まで、ソフトな提案を実現する。世界共通でありながらその対応が全く異なることも学習する。
**◇テーマNo5　「ホームレスネスと社会」**
受講予定学生　＜看護・医・薬・理・工・文・法政経・人文・公共政策・総合国際＞
　文化的な背景からくるホームレス化が引き起こす健康課題について取り組む。イギリスの労働型ホームレス、インドの路上生活者など多様である。ホームレスに至った経緯と、犯罪者には犯罪防止を、生活困窮者にはシェルターなど、それぞれの国や地域の特性に合わせたホームレス生活者の健康課題を解決していく（看護・医文・法政経・人文・公共政策・総合国際）。特に、政策提言が重要であり、それを実現する医療看護ネットワークをどのように推進するかを提案する（人文・公共政策・総合国際）。

本事業は、事前学習、現地演習、バーチャルワークショップを組み合わせて実施することが骨格である。ワークショップをメタバースプラットフォームにて継続的に複数回実施することにより社会課題解決のシナリオcaseが蓄積していく。これをGRIPの社会課題解決演習で活用することにより、現地演習の学習の質の向上を図り、現地演習での学習の質の向上はバーチャルワークショップでのシナリオ・ケース・スタディの精度の向上につながるという好循環を期待する。

(４)GRIPの将来展望

本プログラムの特徴は、地域ケア創生に関わる学部、大学院の国際的ネットワーク構築、複数の国の複数の専門領域の学生が、お互いからお互いについてお互いに学びあうことにより地域ケア創生を目指した社会課題解決方策の共有、COILと現地演習をハイフレックスに混在させた継続的な学習の実現である。従来大学生が現地ボランティアとして活動しさまざまな体験から経験的に獲得してきた社会課題解決のための実践能力の向上を可視化し、正規の学習プログラムとして履修管理と単位認定するものである。また、社会課題の解決に不可欠な専門職連携実践能力の獲得を大学院生レベルで正規科目とする試みでもある。

地域ケアを創生し、持続可能な開発目標３ Universal Health Coverage を実現することのできる専門職がGRIPにより育成されることにより、WHOなどの国際機関での活躍、ヘルスプロモーション関連のNGOでの活躍を期待できる人材育成プログラムになり得る。またこれらの人材の国際ネットワークの強化に貢献することができる。

■魅力的な大学間交流

本事業では、インドのシンビオシス国際大学、英国のレスター大学、オーストラリアのモナシュ大学と連携し、グローバル地域ケアIPEプラス（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program GRIP）を実現させる。上記の質の保証のために、３つの大学とはカリキュラムの調整を行なっているが、それぞれの大学で以下のような強みを有していることにより、特徴あるプログラムの内容を適切な場所で実施し、さらなる大学間の交流を実現させる。

（１）シンビオシス国際大学（インド）の特徴

2000年代以降に著しい経済発展を遂げたインドにおいて、先進的な看護教育を実施している。一方で、インドは、さまざまな地域課題を有しており、連携大学の学習フィールドとして、貧困、持続、人口の課題に取り組むことができる大学となる。これまでの連携を強化してプログラムを着実に実施する。

（２）レスター大学（英国）の特徴

看護発祥であり、看護先進国にある英国において、地域看護に強い大学である。卓越した知識を有し十分な実践教育が可能な大学である。また、千葉大学の医学部との連携が強くグローバルIPE+から発展した、先進看護工学などを実践できる。これまでの医療連携を強化してプログラムを着実に実施する。

（３）モナシュ大学（オーストラリア）の特徴

広大な国土のもと、遠隔医療の最先端国でもあり、その一翼を担う大学である。他の３つの国とは全く異なる国土の成り立ちにより、ネットワークでの看護が発達している。これらの技術を知識として習得するプログラムや次世代遠隔看護を積極的に検討する大学である。千葉大学とはすでに30年近い歴史がありプログラムを着実に実施できる。

以上のように、学習の質保証とそれを利用した多様な大学間交流を加速させる。

（大学名：　　千葉大学　　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

**達成目標** 【①～④合わせて7ページ以内】

**① 将来の関係を見据えた連携強化に資する目標について**

(ⅰ)事業計画全体の達成目標(事業開始～2026年度まで)

本事業の特徴は、1.地域ケア創生に関わる学部大学院の国際的ネットワーク構築、2.GRIPプログラムで相互の国で学び合い自国の地域ケア方策を共有、 3.COILと現地交流をハイフレックスに混在させ継続的な学修を実現であり、この特徴をもとに、以下の評価視点を設定した。

**1.地域ケア創生に関わる学部大学院の国際的ネットワーク構築**
**・定量的目標：**2022年度派遣・受入学生を10名で開始し、最終年度2026年度には派遣・受入を40名に拡大する。地域ケア創生に関わる人材育成のため大学間連携および部局間連携を３件程度新たに締結する。
**・定性的目標：**副専攻GRIPが完成し、６つのオンライン科目および専門職間社会課題解決演習が運用され、カリキュラムおよび授業改善のための評価が終了し、改善が定期的に行われている。そのためのプログラム委員会およびプログラム評価委員会が定期的に開催されている。GRIP科目がJV-Campusに搭載され、視聴活用されている。

**2.GRIPプログラムで相互の国で学び合い自国の地域ケア方策を共有**
**・定量的目標：**事業展開期間において、毎年定期的にメタバースでの自国の地域ケアに関する課題・解決目標・方策を共有する成果発表会が開催され、caseシナリオが最終年度において少なくとも10例蓄積している。
**・定性的目標：**GRIP履修により参加学生の専門職連携実践能力、文化的対応能力と文化的謙虚さ、社会課題解決能力が向上している。また各フィールドにおける社会課題の解決方策オプションが増えており、かつ他国への解決方策の移転可能性が明らかになっている。

**3.COILと現地交流をハイフレックスに混在させ、社会課題解決に関する継続的な学修を実現**
・**定量的目標：**メディア授業、リアルタイムオンライン、Eポートフォリオ、メタバースミーティング、メタバースプレゼンテーション、ケーススタディシナリオシミュレーション教材が効果的に配置され、稼働し、８割以上の受講学生が学習到達目標を達成している。
**・定性的目標：**参加大学間で専門職間社会課題解決のための継続的な学習が行われている。

(ⅱ)中間評価までの達成目標(事業開始～2023年度まで)

事業計画全体における中間評価における達成目標を以下の３つの点において、定量的目標及び定性的目標を設定する。

**1.地域ケア創生に関わる学部大学院の国際的ネットワーク構築**
**・定量的目標：**2022年度派遣・受入学生を10名で開始し、2023年度には派遣・受入を各15名とする。地域ケア創生に関わる人材育成のため大学間連携および部局間連携を１件程度新たに締結する。
**・定性的目標：**副専攻GRIPの６つのオンライン科目が2023年度に完成しており、専門職間社会課題解決演習トライアルがインドにおいて2023年度に実施されている。また日本におけるトライアルフィールドが１か所以上決定している。カリキュラムおよび授業改善のための評価項目が明らかになっている。そのためのGRIPに関するプログラム委員会およびプログラム評価委員会が１回以上開催されている。GRIP科目のうち３分の１程度がJV-Campusに搭載され、視聴活用されている。

**2.GRIPプログラムで相互の国で学び合い自国の地域ケア方策を共有**
**・定量的目標：**2023年度にメタバースでの自国の地域ケアに関する課題・解決目標・方策を共有する成果発表会が開催され、caseシナリオが2023年度に少なくとも２例完成し、２例が完成に向けた準備を行っている。
**・定性的目標：**GRIP履修の学修者評価スケールおよび成績評価基準を参加大学で合意している。専門職連携実践能力については千葉大学が開発したChiba Interprofessional Competency Scaleの使用を予定する。文化的対応能力と文化的謙虚さについては世界で数種類開発されているCultural Competency Scaleから選択、専門職間社会課題解決能力については本事業で開発するため、その方法論が確定している。

**3.COILと現地交流をハイフレックスに混在させ、社会課題解決に関する継続的な学修を実現**
**・定量的目標：**メディア授業、リアルタイムオンライン、Eポートフォリオ、メタバースミーティング、メタバースプレゼンテーション、ケーススタディシナリオシミュレーション教材が効果的に配置され、稼働している。
**・定性的目標：**2023年度に継続的な学修実現に向けた初期課題が明確になっている。

**② 養成しようとするグローバル人材像について**

（ｉ）事業計画全体の達成目標（事業開始～2026年度まで）

本プログラムは、千葉大学で全学部・全大学院を対象として実施する。社会課題の解決はまさに多様な職種間の連携協働および国際的な比較と考察、資源を創造する柔軟な発想が必要とされるためである。

**本プログラムで要請する人材像は、Universal Health Coverage推進のために地域ケアを創生できる専門職である。具体的には、こどもたちの健康状態の改善のためのアクションを取ることができる、その国に必要な医療機器、介護機器を開発できる、健康的な環境を考慮した地域開発ができる、健康資源へのアクセシビリティを改善する、健康習慣の獲得のための教育ができる、高齢者のポリファーマシーの改善に取り組むことができるなど、どの国、どの地域であっても、自国でも他の国でも健康関連の課題に他の専門職とともに取り組み、文化的対応能力及び文化的謙虚さを基盤として、現場での最適解を導き出すことができる自律した組織人、が養成する人材像である。**

Universal Health Coverageのスローガンである「すべての人に健康を」を実現させるため、あらゆる専門領域の人材にこのUniversal Health Coverageを定着させ推進するための、世界規模の人材育成を行う。

（ⅱ）中間評価までの達成目標（事業開始～2023年度まで）

採択後ただちに、副専攻GRIPの設置準備に取り掛かり、2023年度までに７つの科目（合計８単位）を開講する。この７科目は全学共通の新規科目と看護学研究科の開放科目（一部名称変更を行う）の２種類となっている。

〇全学共通の新規科目
専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Social Learning　ISL）
Cultural Competency and Cultural Humanity、社会課題解決基礎、社会課題解決応用

〇看護学研究科の科目の開放
専門職連携基礎、専門職連携実践１、専門職連携実践２、

**このように構成し、学内にあまり多くの科目を設置せずスムースに展開する。**

**また、専門職間社会課題解決演習についてはトライアルで行う。これらの科目の学修者評価と科目評価のルーブリックの試行が終了している。**また専門職連携実践能力、文化的対応能力及び文化的謙虚さ、社会課題解決能力の客観的測定指標について参加大学と合意形成が完了している。

（大学名：千葉大学　　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

## ③－1　学生に修得させる具体的能力のうち、一定の外国語力基準をクリアする日本人学生数の推移について

（ｉ）本事業計画において定める外国語力基準及び同基準をクリアする学生数に関する達成目標

単位：人（延べ人数）

| | 外国語力基準 | 達成目標 | |
|---|---|---|---|
| | | 中間評価まで（事業開始～2023年度まで） | 事後評価まで（事業開始～2026年度まで） |
| | 【参考】本事業計画において派遣する日本人学生合計数 | 25 | 115 |
| 1 | 学部向けGRIP履修・Global Health and Nursing Ⅱで単位認定（CEFR B1以上） | 15 | 50 |
| 2 | GRIP副専攻履修学生（CEFR B2以上） | 8 | 20 |
| 3 | 博士後期課程Global演習で単位認定（CEFR B2以上） | 2 | 5 |

（ⅱ）外国語力基準を定めた考え方

千葉大学では、現在入学後にTOEFLによるプレイスメントテストを入学生全員に実施している。この結果は、その後の学力別クラス編成に利用している。現在では５段階で、CEFRの定めるB1(TOEFL iBT 71以下)、B2(72-79)、B2+(80-94)、C1(95-)、C2 の５段階としている。千葉大学ではスーパーグローバル大学創成支援事業において、グローバル人材としての外国語力基準をCEFRのB2+以上、TOEFL iBT 80（TOEIC730）点以上と定めている。その目標数は、令和５年度までには、学部では5,600名46.7%、大学院では2,000名44.4%を目標としている。本事業では、このSGUで目標としている能力を有していることを条件とするため、大学院生はこのCEFRのB2以上、TOEFL iBT 80（TOEIC730）程度をプログラム参加の要件とする。学部生に関してはB1とする。▪

（ⅲ）事業計画全体の目標達成に向けたプロセス（事業開始～2026年度まで）

本事業では、英語によるディスカッションおよびプレゼンテーションで英語力を必要とする。**大学院生はCEFRの定めるB2+以上のレベルの学生を対象とし、学部生はB1以上の学生を対象とする。**千葉大学では、令和２年度入学の学生より、英語カリキュラムを全面的に改訂して、卒業に必要な単位数を増加させ、専門科目を英語により学習する「アカデミック・プレゼンテーション」を主に実施している。さらに、令和元年度以前に入学した学生には、外国語の授業（必修）以外に、イングリッシュ・コミュニケーション（ブリティッシュ・カウンシルとの連携による会話やディスカッション主体の授業）、イングリッシュ・ハウス（常勤教員によるプレゼンテーションやディスカッションのスキルアップ・トレーニング）の３つの英語学習を備えている。プログラムに参加する学生には、その英語のレベルに合わせて、イングリッシュ・コミュニケーションの履修や、イングリッシュ・ハウスでのトレーニングを推奨し、プログラムでのディスカッションや学生同士のチュートリアルに対応できるようにする。また本事業では、様々な課題に関する現地でのインタビューおよび会議への参加、専門家からの意見聴取などを想定している。従って、そのための英語力を確保することを要件とする。この能力は、選抜時点にチェックできるようにする。また、学部生が副専攻GRIPを聴講することも可能とする。なお、令和２年度より開始された英語カリキュラムの改訂により、令和４年度以降に専門科目の英語による授業が実施される。これは学部の授業であるが、本プログラムで提供される授業の一部を解放して学部生に受講させることも可能である。以上のように、英語の授業の倍増、単位外授業としてのイングリッシュ・ハウスでの学びを通じて語学力の目標を達成させる。

（ⅳ）中間評価までの目標達成に向けたプロセス（事業開始～2023年度まで）

本事業では、英語のレベルをクリアしていることを選抜の要件とするが、選抜時に英語の要求レベルに到達していない、あるいはスキルをあげたいと希望する学生は、イングリッシュ・コミュニケーションおよびイングリッシュ・ハウスで実施している、全学共通のディスカッションとプレゼンテーション用の授業を、英語のレベルによって受講する。**授業は以下の６つの種類を構築する。（１）英語によるジェネラル・コミュニケーションの取得（インタビュー方法など）（２）英語によるディスカッションのポイントと討議内容のまとめ方の構築（３）英語によるプレゼンテーションのプロセスの理論と実践（４）英語によるプレゼンテーション・マテリアルの作成法（５）スチューデント・チュートリアル・システム（STS）に対応する英語による指導方法の基礎（６）ビジュアル・サマリー・レポート、ポートフォリオ、プレゼンテーション資料の作成方法これらの内容を含めた事前学習コンテンツを利用する。**これらの授業はすべてオンデマンド方式で行う。さらに、必要に応じて、プレゼンテーションやディスカッションは、イングリッシュ・ハウスのネイティブの教員の個別指導、看護学研究科のアカデミック英語担当教員の指導を受けられるように調整する。

（大学名：千葉大学　　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

**③－2　学生に修得させる具体的能力のうち、「③－1」以外について**

（ｉ）事業計画全体の達成目標（事業開始～2026年度まで）

本事業で学生に習得させる具体的能力は、A.専門職連携実践能力およびB.社会課題解決能力である。専門職連携実践能力は社会課題解決能力の前提にあり、この二つに共通する具体的能力に文化的対応能力及び文化的謙虚さが含まれる。これを学部生と大学院生に効果的に修得させるため、以下の通り展開する科目ごとに学習到達目標を示す。

**A.専門職連携実践能力**

**WHOが示す専門職連携教育の学習到達目標がチームワーク、専門職の役割と責任の理解、コミュニケーション、内省と学習、住民・患者とのニーズの把握を伴う関係性の構築、同僚への倫理である。この到達目標を基盤として本事業における学習到達目標を図2の通りに設定した。**

図２　専門力連携実践能力

| | |
|---|---|
| 専門混在のチームワークでの課題解決 | チーム学習とその成果の反映 |
| 各専門ごとの役割と責任の明確化 | ニーズを伴うユーザーとの関係円滑化 |
| コミュニケーションとリーダーシップ | 倫理を伴う実践教育 |

**B.社会課題解決能力**

**SDGsの取り組みを参考に、社会課題を見出しアセスメントし、目標と評価の視点を設定したうえで具体的な方策を立案し、実施に向けたアクションを取ることができること、また挑戦し失敗から学ぶことができることとともに、現地の文化や制度をリスペクトし、住民及びステークホルダーと良好な関係を維持しながら社会変革を進めていくことのできる能力であるとした。この能力を獲得することを学習到達目標として図3の通りに設定した。**

図3　社会課題解決能力

| | |
|---|---|
| 地域のアセスメント評価 | 社会政策等の方策立案 |
| 地域課題の抽出 | 効果測定の評価計画立案 |
| 実践型課題の解決目標設定 | 地域における合意形成 |

また**社会課題解決能力は学生の準備状態に応じて図4の通りに定める。**学部生レベルでは、社会課題に関するフィールドワークスキルとデータ収集方法を理解し、実際に地域住民と指導の下でコミュニケーションをとることができ、これらの意見と情報から部分的な課題解決の方向性を検討できること、博士前期課程では地域住民の意見とともに地域のステークホルダーの意見を集約分析したうえで、実践活動に参加し、学生チームの意見をまとめ改善案を提案できること、博士後期課程では、社会課題解決にむけたトータルソリューションの実践ができることを到達目標に学生のレディネスをアセスメントし適切な到達レベルを設定する。

図４　専門職間社会課題演習学習到達目標のレベル

低い
入門・導入

高い
実践・アドバンス

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学生のみによる既存資料からの知識の獲得 | 専門家・実践家・利用者・地域住民らによる<br>OD | 専門家・実践家・利用者・地域住民らによる<br>リアルタイム講義・ディスカッション | 現地での施設・コミュニティ・組織・プログラム<br>見学 | 現地での施設・コミュニティ・組織・プログラム<br>見学＋一部活動参加 | 現地での施設・地域・プログラム活動<br>シャドウイング・運営活動への参加 | 現地での施設・地域・プログラム活動<br>実践計画立案<br>コンサル<br>SV(super vision) | 現地での施設・地域・プログラム活動<br>実践計画立案・実施・評価<br>コンサル<br>SV | 現地での施設・地域・プログラム活動<br>人材育成政策提言など<br>コンサル<br>SV | 現地・当事者への移管<br>遠隔支援<br>コンサル<br>SV |
| | | | | 直接介入 | | 直接介入<br>間接介入 | | | 間接介入<br>持続可能性 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |

医療系学部2年生～4年生　医療系学部5年生～6年生/修士　博士後期課程

以上の学習到達目標を達成するために、本事業で設定する副専攻GRIP科目の到達目標を表3の通りに定める。

表3　副専攻　グローバル地域ケアIPEプラス（GRIP)各科目到達目標

| NO | 科目 | 単位 | 選択/必修 | 学習到達目標 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 専門職連携基礎 | 1 | 選択 | IPEの必要性、理論的背景をSDGSと関連付け説明できる。専門職連携実践活動のタイプと分類を説明できる |
| 2 | 専門職連携実践１ | 1 | 選択 | WHOが提案している専門職連携実践の学習到達目標、役割と責任、コミュニケーション、患者利用者住民との関係構築の内容と方法を説明できる |
| 3 | 専門職連携実践２ | 1 | 選択 | WHOが提案している専門職連携実践の学習到達目標、チームワーキング、同僚への倫理的実践、自己の省察の内容と方法を説明できる |
| 4 | Cultural Competency and Cultural Humility | 1 | 選択 | 文化的謙虚さ及び文化的対応能力の内容と具体的な行動を説明できる |
| 5 | 社会課題解決基礎 | 1 | 選択 | 社会課題の解決に必要なプロジェクトマネジメントのプロセスを説明できる |
| 6 | 社会課題解決応用 | 1 | 選択 | 社会課題の解決に必要な合意形成（アコモデーションとコンセンサス）、対立の分析と解決が説明できる |
| 7 | 専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Social Learning） | 2 | 必修 | 学部レベル、修士レベル、博士レベルごとに設定する（詳細は図4） |

(ⅱ)中間評価までの達成目標(事業開始～2023年度まで)

**本事業GRIPを受講した学生はこれまで述べてきた通り、GRIP各科目の学習到達目標を達成したことを確認できた場合に単位認定をする。**そのため派遣学生、受入学生の人数が予定通りに推移し、2022年度それぞれ10名、2023年度それぞれ15名の学生がGRIP専門職間社会課題解決演習まで履修し単位認定ができれば、グローバルな地域ケア創生を専門職連携により実現できるコンピテンシーを獲得できたと判断できる。

なお、**これまでIPEを受講したことのある学生については、GRIP１から３を既修得単位として読みかえる。**また看護学部４年生で学部選択授業Global Health and Nursing I,およびIIを受講した学生については、GRIP4から6を既修得単位とする。また看護学研究院博士前期課程共通基盤科目専門職連携実践論および専門職連携教育論、災害時専門職連携演習はおなじくGRIP科目１，２，３を既修得単位とする。2023年度までにこのような既修得単位認定の仕組みを作り、医療系学生の履修しやすさに配慮する。▪

**④ 質の保証を伴った大学間交流の枠組みの形成及び拡大に向けた具体的な取組について**

（ｉ）事業計画全体の達成目標（事業開始～2026年度まで）

本事業は、**大学間の国際的な連携により、多様な領域の学生が連携して社会課題解決への取り組みを実施するなかで、お互いからお互いについてお互いに学びあいつつ、文化的対応能力及び文化的謙虚さを基盤とした専門職連携実践能力、社会課題解決能力を獲得することを目指すものである。その究極の目的は、Universal Health Coverageの推進にある。この目的を参加大学が共有しつつ、以下の表４に示す２つのPhase、５つのstepで推進する。**

2026年度以降の展望として多様な国の多様な専門性を有する地域ケア創生人材の国際ネットワークを形成し、Universal Health Coverageを実現する専門職の輩出により、WHOなど国際機関で活躍する人材育成プログラムとして確立することを目指す。

表４　質の保証を伴った大学間交流の枠組みの形成プロセス

| 年度 | Phase | Step | プロセス |
|---|---|---|---|
| 2022 | 1 | 1 | 教材、教育ロジスティックス、教育プログラム質保証の仕組みづくり<br>シンバイオシス大学で社会課題解決演習およびバーシャルワークショップのトライアル |
| 2023 | | 2 | ISLトライアルスタート<br>参加大学プログラム委員会による管理と学修の質保証を本格稼働<br>副専攻GRIPプログラム完成、他大学に参加呼びかけの準備 |
| 2024 | 2 | 3 | GRIPを周知普及する。ドイツ（ライプチヒ大学）、アメリカ（シンシナティ大学）、台湾（台北医学大学）、北アイルランド（アルスター大学）、オーストラリア（シドニー大学）、ベトナム（ハノイ大学）を候補とし準備を進める。 |
| 2025 | | 4 | プログラム評価委員会を設置し、質改善の仕組みをスタートさせる<br>社会課題解決プロジェクトのフォローアップスタディをスタートさせる |
| 2026 | | 5 | GRIPの全体評価を行い、継続実施のためのシステムを構築する |

（ⅱ）中間評価までの達成目標（事業開始～2023年度まで）

表４のPhase1が、本事業における質の保証を伴った大学間交流の仕組み構築に関する中間評価までの達成目標への形成プロセスである。本事業の中間評価達成目標は、①参加大学間で教育プログラム委員会、評価委員会などの設置に向けて合意している。②学生の選抜条件、履修ルール、成績評価ルーブリック、学修者評価に関する方法と評価項目について合意している。③①および②の活動により大学間の人事交流事例が増加する、の３点である。なお、メディア授業プラットフォーム、メタバース、オンラインの環境整備は2022年度中に完成させ、学習環境として十分整える。

（大学名：千葉大学　　）（主な交流先：　英国･インド･オーストラリア　　）

## ⑤ 本事業計画において海外に留学する日本人学生数の推移【1ページ以内】

| 現状（2022年5月1日現在）※1　（単位：人） | 36 |
|---|---|

（ｉ）日本人学生数の達成目標

単位：延べ人数

| | |
|---|---|
| 事業計画全体の達成目標（事業開始～2026年度まで） | 115 |
| 中間評価までの達成目標（事業開始～2023年度まで） | 25 |

（上記の内訳）

（ⅱ）目標を設定した考え方及び達成までのプロセス（事業計画全体、中間評価までの双方について）

単位：人

| | 2022年度 | 2023年度 | 2024年度 | 2025年度 | 2026年度 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 実際に渡航する学生 | | | | | | 0 |
| 自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講する学生 | | | | | | 0 |
| 実渡航とオンライン受講を行う学生 | 10 | 15 | 20 | 30 | 40 | 115 |
| 合計人数 | 10 | 15 | 20 | 30 | 40 | 115 |

(a)実渡航による交流

事前学習およびIPE、GRIP科目をオンラインにより学習、社会課題解決演習は、必ず現地において実施する。この2つをセットで学ぶため、実渡航だけに参加する学生はいない。

(b)オンライン交流

事前学習科目および副専攻GRIP（オンライン科目）を履修することができる。日本人学生との共学が進み、連携大学内の学生・教員が誰でも参加できるシステム上で授業を実施することで、参加する学生・教員が相互に刺激することにより、学習を活性化し質を保証していく。日本人と外国人の両方で授業内での課題等での共同学習が期待できるオンラインでの共学を実施する。また、コロナ後には、海外にいてもどこでも学べるスマート・ラーニングとして継続実施する。科目としては、専門職連携実践能力の獲得及び社会課題解決能力の獲得のための実践的な講義と演習を組み合わせ、メタバースを活用したプレゼンテーションおよび討議、デブリーフィングを組み込む。

(c)実渡航とオンラインを組み合わせたハイブリッド型の交流

オンライン・実渡航の双方のメリットを合わせ相乗効果を持って学修させる。

〇オンライン学習のメリット：オンラインのメリットは、日本あるいは海外にいながらにして複数の大学の授業を受講できることである。学生の渡航時期によっては、通常の開講時期と重なるため、学生がどこにいても受講できるよう、IPE科目群を用意する。参加大学における時差が大きいが、反転授業形式の事前学習オンラインを実施する。これは、千葉大学がこれまで行ってきたCOILを応用するもので、メディアを利用した事前学修、学生からのプレゼンテーションとディスカッション（フリップティーチング部分）、学生同士のディスカッション（スチューデント・チュートリアル）をブレンドした形態で進めているCOIL授業をベースに実施する。

〇**実渡航学習のメリット：実渡航を伴う社会課題解決演習は、学部生、大学院生が混合チームをつくり、レディネスの違い、文化、制度の違いを超え、お互いからお互いについてお互いに学びあう機会を保障する。**この機会を確保することにより学生の文化的謙虚さを涵養し、文化的対応能力をブラッシュアップする。もって、その地域の文化を尊重した解決策を提案できるように教員がファシリテーションする。 現地学生と留学生の相違について検討することができ、多様な解決策を提案できることが最大のメリットである。

このように、オンラインと現地の両方の学習で理解を深め、社会に貢献する提案を共同で実施できる。

※1　現状は、事業の取組単位（全学、学部等）における2022年5月1日現在の人数。

（大学名：　千葉大学　）（主な交流先：英国・インド・オーストラリア　）

## ⑥ 本事業計画において受け入れる外国人学生数の推移【1ページ以内】

| 現状(2022年5月1日現在)※1　(単位:人) | 934 |
|---|---|

(ⅰ)外国人学生数の達成目標

単位:延べ人数

| | |
|---|---|
| 事業計画全体の達成目標(事業開始～2026年度まで) | 115 |
| 中間評価までの達成目標(事業開始～2023年度まで) | 25 |

(上記の内訳)
(ⅱ)目標を設定した考え方及び達成までのプロセス(事業計画全体、中間評価までの双方について)

単位:人

| | 2022年度 | 2023年度 | 2024年度 | 2025年度 | 2026年度 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 実際に渡航する学生 | | | | | | 0 |
| 自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講する学生 | | | | | | 0 |
| 実渡航とオンライン受講を行う学生 | 10 | 15 | 20 | 30 | 40 | 115 |
| 合計人数 | 10 | 15 | 20 | 30 | 40 | 115 |

(a)実渡航による交流
事前学習およびIPE、GRIP科目をオンラインにより学習、社会課題解決演習は、必ず現地において実施する。この2つをセットで学ぶため、実渡航だけに参加する学生はいない。

(b)オンラインによる交流
事前学習科目および副専攻GRIP(オンライン科目)を履修することができる。日本人学生との共学が進み、連携大学内の学生・教員が誰でも参加できるシステム上で授業を実施することで、参加する学生・教員が相互に刺激することにより、学習を活性化し質を保証していく。日本人と外国人の両方で授業内での課題等での共同学習が期待できるオンラインでの共学を実施する。 また、COVID-19パンデミック収束後には、海外にいてもどこでも学べるスマート・ラーニングとして継続実施する。科目としては、専門職連携実践能力の獲得及び社会課題解決能力の獲得のための実践的な講義と演習を組み合わせ、メタバースを活用したプレゼンテーションおよび討議、デブリーフィングを組み込む。

(c)実渡航とオンラインを組み合わせたハイブリッド型の交流
オンライン・実渡航の双方のメリットを合わせ相乗効果を持って学修させる。

○オンライン学習のメリット:オンラインのメリットは、日本あるいは海外にいながらにして複数の大学の授業を受講できることである。学生の渡航時期によっては、通常の開講時期と重なるため、学生がどこにいても受講できるよう、IPE科目群を用意する。参加大学における時差が大きいが、反転授業形式の事前学習オンラインを実施する。これは、千葉大学がこれまで行ってきたCOILを応用するもので、メディアを利用した事前学修、学生からのプレゼンテーションとディスカッション(フリップティーチング部分)、学生同士のディスカッション(スチューデント・チュートリアル)をブレンドした形態で進めているCOIL授業をベースに実施する。
○実渡航学習のメリット:実渡航を伴う社会課題解決演習は、学部生、大学院生が混合チームをつくり、レディネスの違い、文化、制度の違いを超え、お互いからお互いについてお互いに学びあう機会を保障する。この機会を確保することにより学生の文化的謙虚さを涵養し、文化的対応能力をブラッシュアップする。もって、その地域の文化を尊重した解決策を提案できるように教員がファシリテーションする。 現地学生と留学生の相違について検討することができ、多様な解決策を提案できることが最大のメリットである。

このように、オンラインと現地の両方の学習で理解を深め、社会に貢献する提案を日本人と共同で実施できる。

※1　現状は、事業の取組単位(全学、学部等)における2022年5月1日現在の人数。

(大学名:　千葉大学　)　(主な交流先: 英国・インド・オーストラリア　)

⑦　**交流学生数について**（2022年度は事業開始以後の人数）　（単位：人）

（ⅰ）本事業で計画している交流学生数

| 各年度の派遣及び受入合計人数（交流期間、単位取得の有無等の内訳は（ⅲ）表参照） | 2022年度 | | 2023年度 | | 2024年度 | | 2025年度 | | 2026年度 | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 |
| | 10 | 10 | 15 | 15 | 20 | 20 | 30 | 30 | 40 | 40 | 115 | 115 |
| 実際に渡航する学生（以下「実渡航」） | | | | | | | | | | | 0 | 0 |
| 自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講する学生（以下「オンライン」） | | | | | | | | | | | 0 | 0 |
| 実渡航とオンライン受講を行う学生（以下「ハイブリッド」） | 10 | 10 | 15 | 15 | 20 | 20 | 30 | 30 | 40 | 40 | 115 | 115 |

（ⅱ）国内大学及び交流プログラムごとの交流学生数

| 交流形態 | |
|---|---|
| ① | 単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 |
| ② | 単位取得を伴う交流期間30日以上３ヶ月未満の交流 |
| ③ | 単位取得を伴う交流期間３ヶ月以上の交流 |
| ④ | 上記以外の交流期間30日未満の交流 |
| ⑤ | 上記以外の交流期間30日以上３ヶ月未満の交流 |
| ⑥ | 上記以外の交流期間３ヶ月以上の交流 |

| 学生別 | |
|---|---|
| A | 学部生 |
| B | 大学院生 |

| | |
|---|---|
| 実 | 実渡航 |
| オ | オンライン |
| ハ | ハイブリッド |

１．【代表申請大学】

大学名　千葉大学

| 交流プログラム名（相手大学名） | 交流方向 | 交流形態 | 学生別 | 2022年度 | | | 2023年度 | | | 2024年度 | | | 2025年度 | | | 2026年度 | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | |
| 学部学生GRIP | 派遣 | ① | A | | | 10 | | | 10 | | | 15 | | | 20 | | | 25 | 80 |
| 学部学生GRIP | 受入 | ④ | A | | | 10 | | | 10 | | | 15 | | | 20 | | | 25 | 80 |
| 副専攻GRIP | 派遣 | ① | B | | | | | | 3 | | | 3 | | | 5 | | | 8 | 19 |
| 副専攻GRIP | 受入 | ① | B | | | | | | 3 | | | 3 | | | 5 | | | 8 | 19 |
| 博士後期課程GRIP | 派遣 | ① | B | | | | | | 2 | | | 2 | | | 5 | | | 7 | 16 |
| 博士後期課程GRIP | 受入 | ④ | B | | | | | | 2 | | | 2 | | | 5 | | | 7 | 16 |

２．【国内連携大学等】

大学名

| 交流プログラム名（相手大学名） | 交流方向 | 交流形態 | 学生別 | 2022年度 | | | 2023年度 | | | 2024年度 | | | 2025年度 | | | 2026年度 | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | |
| | 派遣 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 受入 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 派遣 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 受入 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |

（大学名：　千葉大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

（iii）本事業で計画している交流学生数（派遣・受入別 各内訳の集計）

**【日本人学生の派遣】**

| | | | 2022年度 | 2023年度 | 2024年度 | 2025年度 | 2026年度 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年度別合計人数 | | 学生別 | 10 | 15 | 20 | 30 | 40 | 115 |
| 【交流形態別　内訳】 | | | | | | | | |
| ①　単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | | | 10 | 15 | 20 | 30 | 40 | 115 |
| | 実渡航 | | | | | | | 0 |
| | オンライン | | | | | | | 0 |
| | ハイブリッド | | 10 | 15 | 20 | 30 | 40 | 115 |
| ②　単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 実渡航 | | | | | | | 0 |
| | オンライン | | | | | | | 0 |
| | ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ③　単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 実渡航 | | | | | | | 0 |
| | オンライン | | | | | | | 0 |
| | ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ④　上記以外の交流期間30日未満の交流 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 実渡航 | | | | | | | 0 |
| | オンライン | | | | | | | 0 |
| | ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ⑤　上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 実渡航 | | | | | | | 0 |
| | オンライン | | | | | | | 0 |
| | ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ⑥　上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 実渡航 | | | | | | | 0 |
| | オンライン | | | | | | | 0 |
| | ハイブリッド | | | | | | | 0 |

（大学名：　千葉大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

様式２

| 【外国人学生の受入】 | | 2022年度 | 2023年度 | 2024年度 | 2025年度 | 2026年度 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年度別合計人数 | 学生別 | 10 | 15 | 20 | 30 | 40 | 115 |
| 【交流形態別　内訳】 | | | | | | | |
| ①　単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | | 0 | 3 | 3 | 5 | 8 | 19 |
| 実渡航 | | | | | | | 0 |
| オンライン | | | | | | | 0 |
| ハイブリッド | | | 3 | 3 | 5 | 8 | 19 |
| ②　単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 実渡航 | | | | | | | 0 |
| オンライン | | | | | | | 0 |
| ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ③　単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 実渡航 | | | | | | | 0 |
| オンライン | | | | | | | 0 |
| ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ④　上記以外の交流期間30日未満の交流 | | 10 | 12 | 17 | 25 | 32 | 96 |
| 実渡航 | | | | | | | 0 |
| オンライン | | | | | | | 0 |
| ハイブリッド | | 10 | 12 | 17 | 25 | 32 | 96 |
| ⑤　上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 実渡航 | | | | | | | 0 |
| オンライン | | | | | | | 0 |
| ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ⑥　上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 実渡航 | | | | | | | 0 |
| オンライン | | | | | | | 0 |
| ハイブリッド | | | | | | | 0 |

（大学名：　千葉大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

（ⅳ）派遣・受入別　交流プログラム学生数の詳細

**①日本人学生の派遣【計画】**

| 年度 | 交流期間 | | | 派遣元大学 | 派遣先大学 | 派遣相手国 | 交流内容（交流プログラム名等） | 交流形態 | 学生別 | 交流学生数 | （内訳） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | | | 実渡航 | オンライン | ハイブリッド |
| 22 | 2 | ~ | 3 | 千葉大学 | シンピオシス国際大学 | インド | 学部学生GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | A | 10 | | | 10 |
| 23 | 2 | ~ | 3 | 千葉大学 | シンピオシス国際大学レスター大学 | インド、英国 | 学部学生GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | A | 10 | | | 10 |
| 23 | 2 | ~ | 3 | 千葉大学 | シンピオシス国際大学レスター大学 | インド、英国 | 副専攻GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | B | 3 | | | 3 |
| 23 | 2 | ~ | 3 | 千葉大学 | シンピオシス国際大学レスター大学 | インド、英国 | 博士後期課程GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | B | 2 | | | 2 |
| 24 | 2 | ~ | 3 | 千葉大学 | シンピオシス国際大学レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国オーストラリア | 学部学生GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | A | 15 | | | 15 |
| 24 | 2 | ~ | 3 | 千葉大学 | シンピオシス国際大学レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国オーストラリア | 副専攻GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | B | 3 | | | 3 |
| 24 | 2 | ~ | 3 | 千葉大学 | シンピオシス国際大学レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国オーストラリア | 博士後期課程GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | B | 2 | | | 2 |
| 25 | 2 | ~ | 3 | 千葉大学 | シンピオシス国際大学レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国オーストラリア | 学部学生GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | A | 20 | | | 20 |
| 25 | 2 | ~ | 3 | 千葉大学 | シンピオシス国際大学レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国オーストラリア | 副専攻GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | B | 5 | | | 5 |
| 25 | 2 | ~ | 3 | 千葉大学 | シンピオシス国際大学レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国オーストラリア | 博士後期課程GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | B | 5 | | | 5 |
| 26 | 2 | ~ | 3 | 千葉大学 | シンピオシス国際大学レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国オーストラリア | 学部学生GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | A | 25 | | | 25 |
| 26 | 2 | ~ | 3 | 千葉大学 | シンピオシス国際大学レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国オーストラリア | 副専攻GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | B | 8 | | | 8 |
| 26 | 2 | ~ | 3 | 千葉大学 | シンピオシス国際大学レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国オーストラリア | 博士後期課程GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | B | 7 | | | 7 |

**②外国人学生の受入【計画】**

| 年度 | 交流期間 | | | 派遣元大学 | 派遣相手国 | 派遣先大学 | 交流内容（交流プログラム名等） | 交流形態 | 学生別 | 交流学生数 | （内訳） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | | | 実渡航 | オンライン | ハイブリッド |
| 22 | 2 | ~ | 3 | シンピオシス国際大学 | インド | 千葉大学 | 学部学生GRIP | ④：上記以外の交流期間30日未満の交流 | A | 10 | | | 10 |
| 23 | 2 | ~ | 3 | シンピオシス国際大学、レスター大学 | インド。英国 | 千葉大学 | 学部学生GRIP | ④：上記以外の交流期間30日未満の交流 | A | 10 | | | 10 |
| 23 | 2 | ~ | 3 | シンピオシス国際大学、レスター大学 | インド。英国 | 千葉大学 | 副専攻GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | B | 3 | | | 3 |
| 23 | 2 | ~ | 3 | シンピオシス国際大学、レスター大学 | インド。英国 | 千葉大学 | 博士後期課程GRIP | ④：上記以外の交流期間30日未満の交流 | B | 2 | | | 2 |
| 24 | 2 | ~ | 3 | シンピオシス国際大学、レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国、オーストラリア | 千葉大学 | 学部学生GRIP | ④：上記以外の交流期間30日未満の交流 | A | 15 | | | 15 |
| 24 | 2 | ~ | 3 | シンピオシス国際大学、レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国、オーストラリア | 千葉大学 | 副専攻GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | B | 3 | | | 3 |
| 24 | 2 | ~ | 3 | シンピオシス国際大学、レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国、オーストラリア | 千葉大学 | 博士後期課程GRIP | ④：上記以外の交流期間30日未満の交流 | B | 2 | | | 2 |
| 25 | 2 | ~ | 3 | シンピオシス国際大学、レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国、オーストラリア | 千葉大学 | 学部学生GRIP | ④：上記以外の交流期間30日未満の交流 | A | 20 | | | 20 |
| 25 | 2 | ~ | 3 | シンピオシス国際大学、レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国、オーストラリア | 千葉大学 | 副専攻GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | B | 5 | | | 5 |
| 25 | 2 | ~ | 3 | シンピオシス国際大学、レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国、オーストラリア | 千葉大学 | 博士後期課程GRIP | ④：上記以外の交流期間30日未満の交流 | B | 5 | | | 5 |
| 26 | 2 | ~ | 3 | シンピオシス国際大学、レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国、オーストラリア | 千葉大学 | 学部学生GRIP | ④：上記以外の交流期間30日未満の交流 | A | 25 | | | 25 |
| 26 | 2 | ~ | 3 | シンピオシス国際大学、レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国、オーストラリア | 千葉大学 | 副専攻GRIP | ①：単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | B | 8 | | | 8 |
| 26 | 2 | ~ | 3 | シンピオシス国際大学、レスター大学、モナシュ大学 | インド、英国、オーストラリア | 千葉大学 | 博士後期課程GRIP | ④：上記以外の交流期間30日未満の交流 | B | 7 | | | 7 |

（大学名：　千葉大学　　）　　（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

## ⑧　海外相手大学との単位互換について

（ｉ）単位互換を実施する海外相手大学数【計画】

（単位：校）

| | 2022年度 | | 2023年度 | | 2024年度 | | 2025年度 | | 2026年度 | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 |
| 単位互換を実施する海外相手大学数 | 1 | 0 | 2 | 1 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 12 | 10 |

（ⅱ）相手大学ごとの単位互換内訳【計画】

【派遣する日本人学生が取得した単位の互換】

１．代表申請大学　　【大学名：　千葉大学　　】

| 相手大学名 | | 学生別 | 2022年度 | 2023年度 | 2024年度 | 2025年度 | 2026年度 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| シンビオシス国際大学 | 認定者数 | | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 10 |
| | 認定単位数 | | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 | 8 |
| レスター大学 | 認定者数 | | | 1 | 1 | 1 | 1 | 4 |
| | 認定単位数 | | | 1 | 1 | 2 | 2 | 6 |
| モナシュ大学 | 認定者数 | | | | 1 | 1 | 1 | 3 |
| | 認定単位数 | | | | 1 | 1 | 2 | 4 |
| 年度別認定者数合計 | | | 2 | 3 | 4 | 4 | 4 | 17 |
| 年度別認定単位合計 | | | 1 | 2 | 4 | 5 | 6 | 18 |

２．国内連携大学　　【大学名：　　】

| 相手大学名 | | 学生別 | 2022年度 | 2023年度 | 2024年度 | 2025年度 | 2026年度 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 認定者数 | | | | | | | 0 |
| | 認定単位数 | | | | | | | 0 |
| | 認定者数 | | | | | | | 0 |
| | 認定単位数 | | | | | | | 0 |
| | 認定者数 | | | | | | | 0 |
| | 認定単位数 | | | | | | | 0 |
| 年度別認定者数合計 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 年度別認定単位合計 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

（大学名：　千葉大学　　）（主な交流先　　英国・インド・オーストラリア　　）

⑨　学生主催イベント・ワークショップの開催数、参加規模について。

| | イベント・ワークショップ名 | 開催年月 | 開催回数 | 参加人数 | 参加国 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | バーチャルワークショップ | 2023年3月 | 1 | 20 | インド |
| 2 | バーチャルワークショップ | 2024年3月 | 1 | 50 | インド、英国 |
| 3 | バーチャルワークショップ | 2025年3月 | 1 | 70 | インド、英国、オーストラリア |
| 4 | バーチャルワークショップ | 2026年3月 | 1 | 70 | インド、英国、オーストラリア |
| 5 | バーチャルワークショップ | 2027年3月 | 1 | 80 | インド、英国、オーストラリア |

（大学名： 千葉大学　　）（主な交流先　　英国・インド・オーストラリア　　）

⑩　**インターンシップの実施計画について**（2022年度は事業開始以後の人数）　（単位：人）

（ⅰ）本事業で計画している交流学生のうちインターンシップに参加する学生数

| 各年度の派遣及び受入合計人数（交流期間、単位取得の有無等の内訳は（ⅲ）表参照） | 2022年度 | | 2023年度 | | 2024年度 | | 2025年度 | | 2026年度 | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 | 派遣 | 受入 |
| | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 6 | 6 |
| 実際に渡航する学生（以下「実渡航」） | | | | | | | | | | | 0 | 0 |
| 自国にてインターンシップをオンラインで受講する学生（以下「オンライン」） | | | | | | | | | | | 0 | 0 |
| 実渡航とオンライン受講を行う学生（以下「ハイブリッド」） | | | | | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 6 | 6 |

（ⅱ）国内大学及びプログラムごとのインターンシップに参加する学生数

| 交流形態 | | |
|---|---|---|
| | ① | 単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 |
| | ② | 単位取得を伴う交流期間30日以上３ヶ月未満の交流 |
| | ③ | 単位取得を伴う交流期間３ヶ月以上の交流 |
| | ④ | 上記以外の交流期間30日未満の交流 |
| | ⑤ | 上記以外の交流期間30日以上３ヶ月未満の交流 |
| | ⑥ | 上記以外の交流期間３ヶ月以上の交流 |

| 学生別 | | |
|---|---|---|
| | A | 学部生 |
| | B | 大学院生 |

| | |
|---|---|
| 実 | 実渡航 |
| オ | オンライン |
| ハ | ハイブリッド |

１．【代表申請大学】

大学名　千葉大学

| プログラム名（相手大学名） | 交流方向 | 交流形態 | 学生別 | 2022年度 | | | 2023年度 | | | 2024年度 | | | 2025年度 | | | 2026年度 | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | |
| GRIP専門職間社会課題解決演習 | 派遣 | ① | A | | | | | | | | | 2 | | | 2 | | | 2 | 6 |
| | 受入 | ④ | A | | | | | | | | | 2 | | | 2 | | | 2 | 6 |
| | 派遣 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 受入 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 派遣 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 受入 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |

２．【国内連携大学等】

大学名

| プログラム名（相手大学名） | 交流方向 | 交流形態 | 学生別 | 2022年度 | | | 2023年度 | | | 2024年度 | | | 2025年度 | | | 2026年度 | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | 実 | オ | ハ | |
| | 派遣 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 受入 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 派遣 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| | 受入 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |

（大学名：　千葉大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

（ⅲ）本事業で計画している交流学生のうちインターンシップに参加する学生数（派遣・受入別 各内訳の集計）

**【日本人学生の派遣】**

| | | | 2022年度 | 2023年度 | 2024年度 | 2025年度 | 2026年度 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年度別合計人数 | | 学生別 | 0 | 0 | 2 | 2 | 2 | 6 |
| 【交流形態別　内訳】 | | | | | | | | |
| ①　単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | | | 0 | 0 | 2 | 2 | 2 | 6 |
| | 実渡航 | | | | | | | 0 |
| | オンライン | | | | | | | 0 |
| | ハイブリッド | | | | 2 | 2 | 2 | 6 |
| ②　単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 実渡航 | | | | | | | 0 |
| | オンライン | | | | | | | 0 |
| | ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ③　単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 実渡航 | | | | | | | 0 |
| | オンライン | | | | | | | 0 |
| | ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ④　上記以外の交流期間30日未満の交流 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 実渡航 | | | | | | | 0 |
| | オンライン | | | | | | | 0 |
| | ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ⑤　上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 実渡航 | | | | | | | 0 |
| | オンライン | | | | | | | 0 |
| | ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ⑥　上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 実渡航 | | | | | | | 0 |
| | オンライン | | | | | | | 0 |
| | ハイブリッド | | | | | | | 0 |

（大学名：　千葉大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

様式２

| 【外国人学生の受入】 | | 2022年度 | 2023年度 | 2024年度 | 2025年度 | 2026年度 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年度別合計人数 | 学生別 | 0 | 0 | 2 | 2 | 2 | 6 |
| 【交流形態別　内訳】 | | | | | | | |
| ①　単位取得を伴う交流期間30日未満の交流 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 実渡航 | | | | | | | 0 |
| オンライン | | | | | | | 0 |
| ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ②　単位取得を伴う交流期間30日以上3ヶ月未満の交流 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 実渡航 | | | | | | | 0 |
| オンライン | | | | | | | 0 |
| ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ③　単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 実渡航 | | | | | | | 0 |
| オンライン | | | | | | | 0 |
| ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ④　上記以外の交流期間30日未満の交流 | | 0 | 0 | 2 | 2 | 2 | 6 |
| 実渡航 | | | | | | | 0 |
| オンライン | | | | | | | 0 |
| ハイブリッド | | | | 2 | 2 | 2 | 6 |
| ⑤　上記以外の交流期間30日以上3ヶ月未満の交流 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 実渡航 | | | | | | | 0 |
| オンライン | | | | | | | 0 |
| ハイブリッド | | | | | | | 0 |
| ⑥　上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 実渡航 | | | | | | | 0 |
| オンライン | | | | | | | 0 |
| ハイブリッド | | | | | | | 0 |

（大学名：　千葉大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

## ⑪　国際プレゼンスの向上等について

（設定指標）

| | 2022年度 | 2023年度 | 2024年度 | 2025年度 | 2026年度 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （指標１）オンライン教育科目開発数 | 6 | 6 | 1 | | | 13 |
| （指標２）社会課題caseシナリオ開発 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 10 |
| （指標３）メタバースでの成果発表会公開 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| （指標４） | | | | | | 0 |
| （指標５） | | | | | | 0 |

【計画内容】
指標１：現在千葉大学亥鼻IPEが保有している専門職連携教育コンテンツおよび大学院専門職連携コンテンツ6つを2022年度に、副専攻GRIP7科目（8単位）のうち6科目6単位分は2023年度に開発を完了し、JV-Campusに搭載し公開する。またGRIP科目専門職間社会課題解決演習の事前学習コンテンツも同様に2024年度にJV-Campusに搭載し公開する。
指標２：専門職間社会課題解決演習のアウトプットであるcaseシナリオは毎年2事例ずつメタバース内に蓄積し、GRIP履修学生だけでなく聴講希望の学生にも公開する。
指標３：毎年1回、GRIP専門職間社会課題解決演習の成果発表会を実施するが、聴講希望者に公開する

## ⑫　⑪を除く、学内・学外への事業の波及効果について

（設定指標）

| | 2022年度 | 2023年度 | 2024年度 | 2025年度 | 2026年度 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （指標１）研究者交流数 | 2 | 2 | 4 | 4 | 4 | 16 |
| （指標２）大学間交流協定数 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| （指標３）国際IPEサービスラーニングに関する論文数 | | 2 | 2 | 3 | 3 | 10 |
| （指標４） | | | | | | 0 |
| （指標５） | | | | | | 0 |

【計画内容】
指標１：インド、英国、オーストラリアとの研究者交流人数の達成目標を示した。
指標２：大学間交流協定数は、毎年１つずつ増やす計画とした。
指標３：国際IPEサービスラーニングに関する論文数を目標値として設定した。

（大学名：　千葉大学　　）　（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

⑬　加点事項に関する取組

【実績･準備状況】

本学においては、留学生の入試枠を設け、受け入れていることや、亥鼻キャンパス全体にて留学生と日本人学生の交流会を開催するなど、国籍や出身を問わず、学生が交流しともに学ぶ土壌や風土は整っている。さらに、これまでグローバルIPEとして、日本人学生および外国人学生あるいは留学生とともに問題解決に取り組んできた実績がある。また、これまで実施してきたGlobal Health and Nursing Ⅱ及びその前身科目である異文化看護演習においても、本学の学生および米国、タイ、英国などで日本人学生、現地学生、他国から来ている留学生なども含め、臨地実習や検討会を実施したという多数の実績を有している。本学教員においても、留学生来訪時は、本学学生の授業科目に留学生を包含し、英語での授業提供や帰国子女学生が主となってコミュニケーションをとるようにアレンジした。COVID-19パンデミック以前より、COILにおいては、本学学生と交流大学学生とでペアあるいはグループとなり、あるトピックについて課題を選定し、相互の社会文化や価値感を尊重しつつも、共通問題の解決となるような案について提示・発表などに取り組んできた。このように、常に本学学生と留学生、外国人学生がともにチームとなって課題に取り組めるように環境調整を実施してきた。

〇世界的課題解決に向けた、国内外の大学及び地域・社会とも連携した計画

**元来、本学は全学的にISO活動に熱心であり、国内の大学では唯一、ISO14001と50001の両方を取得している。こうした風土も背景にありつつ、教育においては、看護学研究科ではこれまでも5大学連携の下に災害看護学コースを設置するなど、リーダー的存在として防災・減災に看護の立場から他職種専門家、行政、地域住民などと協働して取り組むモデルを提示し、人材を育成してきた実績を有する。**学部教育においても授業を提供し、4年次の統合実習の一環として、東京都内の路上生活者支援組織にて臨地実習のプログラムを提供している。これは、通称「山谷」と言われる地域において、世界的に活動が広く知られるNPO、多職種専門家やボランティアの医療者、地域住民、さらに元路上生活者であるボランティア、海外からの留学者や旅行者のボランティア、様々な大学の多様な学部・大学院からの実習生などが参集し、路上生活者や生活困窮者に対して支援を行うものである。この実習においては、参加学生は自ら関係施設にアポイントをとり訪問したり、また、**他大学の例えば都市工学を学ぶ学生や、海外のボランティア学生、国内のボランティアなどとともに物資提供の活動や、カンファレンスなどを行うなどしている。なお、このNPOは、生活困窮者のための無料クリニックを運営しており、そこでも看護実習を行っている。この実習経験者は海外青年協力隊として海外でも活躍する者が多々みられ、そうした卒業生がまた、本学学生に対し、教育講演を行うなどの好循環となっている。**さらに、学生のみならず、教員も自ら社会貢献活動として、国際NPOのメンバーとして、途上国において現地政府や医療組織、医療者、現地スタッフ、住民とともに現地のメンタルヘルス支援に携わるなどしており、世界的課題解決に関する高い意識を有している。そのNPO活動の一環であるスタディツアーに本学学生や他教員も参加し、世界的な課題やリソースの少ない地域での支援について能動的に学習し、その成果を学内学生にも発表してきた実績もある。こうした教員の社会貢献活動によるネットワークも、本事業においては招聘講演等として、リソースとして活用することも検討している。

〇本事業を通じ、国際共同研究の土台となるような国際ネットワークを構築する。

これまで本学において実施してきた国際交流プログラムを有する授業科目や教育活動については、交流大学及び本学の留学科目担当教員らによる連名、ならびに参加学生らがそれぞれ報告書という形で成果発信を行ってきた。本事業においても、インド、英国、オーストラリアそして日本において、GRIPについてはもちろんのこと、リソースの乏しい地域や地域的課題、社会文化経済的背景をも考慮した支援について、学生も支援チームとして含めた介入方法等についても国際共同研究を行う予定である。本事業GRIPそのものが、学修効果のみならず、問題解決の有効性もその学修成果として含めるシステムとして構築されている。それ故、学修活動の提供が一部はそのまま支援へと活用でき、効果評価については国際共同研究として発信できるという互恵的な事業特性となっている。

**〇真の両国間の架け橋となる人材を目指し双方の文化及び言語について高いレベルで習得する計画**

前述の通り、このGRIPのプロトタイプとなるような、特に、国内の実習科目においても海外青年協力隊など、実際に世界的に活躍する人材を輩出している。このような蓄積を基盤として、GRIPでは、プログラム内においては大学間で学生がペアやグループを組むことにより、更なる関係も発展することが期待される。こうしたことから、本事業実施後は、多くの学生が両国間の架け橋として活躍する人材となることが期待される。

**〇　アウトカムに関する指標について、他大学の参考となる指標が設定されているか。**

これまでも特にグローバルIPEなどにおいては、具体的な学習outcomeである到達目標をルーブリックとして示し、外国人留学生と本学学生を混合にて学習活動を行う際にも使用してきた実績がある。本事業においてもISLやGRIP科目別到達目標に示したように、まずは学習進行度や学年によって、学習活動の段階や目標を、レベルとしてルーブリックで提示している。これは他大学でも活用可能である。また、世界の170の大学で形成するThe Consortium of Universities for Global Health (CUGH) が発刊するGlobal Health Competencyマニュアルも参照しているため、世界的規模ならびにレベルでの評価および活用が可能である。

【計画内容】

本事業における学習活動は、実績・準備状況で述べたような千葉大学が全学的に取り組んできた社会課題解決活動を基盤とし、医療系学部が蓄積してきた専門職連携教育実施評価の知見を活用するものである。これに加えてCOVID-19パンデミックにより発展させたスマートラーニング、ハイフレックス授業などの環境設備と教育ロジスティックスを最大限生かす計画である。フィールドワークにおいても活動記録を、個人情報やプライバシー保護、文化的謙虚さに配慮しながらデジタルにて記録することとなっている。フィールドの記録については360°カメラを活用して画像として残し成果発表やその後のJV-Campus格納までを一連のプロセスとして想定している。

さらに、本事業においてはメタバースプラットフォームを用いることとしている。これは主には、事後のワークショップでの活用であるが、事前のオンラインでのグループ学習等にも活用可能として計画している。本事業にて使用するメタバースプラットフォームは、日本企業が開発・提供しているものであり、４万人がバーチャルオフィスとして利用している。国内の多くの大学がオープンキャンパスや進路相談ツールとしても利用し、さらに、学術団体が学会会場として使用した例が多々報告されている。本事業実施に備え、申請教員らはいくつかのメタバースプラットフォームを試用したが、多くは海外企業が開発・提供したものであり、多言語に対応していない、独自のアカウントを取得する必要がある、独自のソフトをインストールする必要がある等、大学内のネットワークセキュリティ上利用不可などのものが多数あったなか、本事業で試用するメタバースプラットフォームは、WEBブラウザで利用でき、特別なデバイスやアカウント取得も不要である。また、このメタバースプラットフォーム内に集合し、自分たちの言語で容易に会話やビデオ通話が可能であり、使用も容易である。利用者としてのアクセシビリティが高いメタバースプラットフォームを用いることで、学生のDX推進にもつながる。さらに、本事業に活用することにより、日本製のメタバースプラットフォームを海外にも知らしめ、利用拡大の可能性も有している。更に、国際的な事業に用いることにより、日本のDX進化・利用推進にもつながる可能性もある。

（大学名：千葉大学　　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備　【①～③合わせて３ページ以内】

① 日本人学生の派遣のための環境整備

【実績・準備状況】

千葉大学は、令和２年度以降に入学した学生を対象に ENGINE プランを開始しており、「全員留学」を実施するための体制を整備してきた。そのため、留学生課に「留学支援室」を設け、様々な大学との連携によるプログラムの構築から、大学独自の留学プログラムの企画・立案・実施及び管理をしており、いわば派遣のプロ集団として学内の学生に対応している。全員留学の緊急代替措置として、令和３年度にはオンライン留学を 60 プログラム構築し実施、全員留学を継続させている。本事業においても、留学支援室の支援のもとに事業を実施する。

経済面での支援においては、留学プログラムに参加する場合、必ず何らかの奨学金が給付されるように制度が定められている。また留学プログラム数の増加にともない、学生の選択肢が増えているため学生が参加プログラムを選ぶ際、学生の英語レベルやコストなどを考慮した分かりやすい情報提供を行っている。その他法人としての危機管理については、平成 28 年９月、危機管理規程および危機管理マニュアルを整備し、有事の際には対策本部を設置し、機動的に対応できる体制を構築した。看護学研究科では海外留学危機管理マニュアルを策定し運用中である。

【計画内容】

本事業は、千葉大学国際企画課および留学生課と留学前・留学中・留学後のトータルな派遣体制を既存の千葉大学の支援システムを活用して支援する。教員が実施するプログラム以外の支援は以下のように実施する。

（1）《留学前》 本事業は、全学を対象にしている。GRIPプログラムのマネジメントは、千葉大学大学院学務担当者と連携を取りつつGRIP運営委員会が実施する。また、学生の派遣に関する様々な支援は、留学生課の留学支援室が実施し、学生募集は、全学で行う。プログラムの広報は、主体となる専攻における説明会や、副専攻学位に関する説明会を年に２回、４月と10月に実施する。選抜された学生は、事前学習プログラムを利用し、IPEおよび社会課題解決手法による学習はもとより日本文化学習も行い留学準備をする。

（2）《留学中》専門職間社会課題解決演習留学は、30日以内の短期間であるが、事前学習を十分に行い学修成果のあるものにする。そのため、留学の準備状態を評価し、学修成果を得た学生を現地に派遣する。留学する学生は、留学支援室＋SULA＋研究科教員が共同で支援する体制を取る。留学中の取組の報告は、教員と留学支援室の両方に報告する。本演習はT3もしくはT6で実施するため、帰国後は、30日以内に報告会を開催する。現地の危機管理は、連携大学および千葉大学教員、現地支援員、特命研究員などからの多面的なサポートにより、安全な生活が送れるようにすることで、より一層の安心感を与える。また、連携大学との連絡を取り、安心したインターンシップ派遣を実施する。

（3）《留学後》 事前学習と同様に、メタバースにて、留学した学生を集めて、報告会の準備および開催と併せて必要な指導、フォローアップを実施する。COIL-JUSUなどで蓄積したノウハウを最大限活用し、きめ細かいフォローアップを実施する。成果発表会は、留学した学生のまとめの場であると同時に、次回派遣される学生の目的意識の明確化、留学希望学生への多様で多彩な情報の提供の場であり、留学数拡大のスパイラルアップには重要な役割を担っている。さらに、本事業ではケーススタディシナリオの開発と蓄積という役割もある。またインターンシップは医療系に限定するが、インド、オーストラリア、英国での医療系インターンシップ開発は、インドからの留学生確保にもよい影響を及ぼすと考える。

## ② 外国人学生の受入のための環境整備

【実績・準備状況】

千葉大学では、年間約 3,000 名の外国人学生を受入れている。この外国人学生は、大きく、（1）学位取得目的の学生、（2）協定校からの短期・中期留学等の学生、の２つに分類できる。このうち、本プログラムにおける受入れは、（2）区分の学生として受入れる。（2）区分の学生は、現在 56 ヶ国 500 以上の大学や機関から、毎年 2,000 名程度の学生を受入れている実績がある。本事業もこれまでの実績を生かして受入れを行う。短期・中期の学生は、大学の寮を利用する学生も多いが、民間のアパートやホテルも多く利用している。そのため多様な生活環境下でのキャンパスライフとなるが、これには**留学生課にワンストップサービス機能を備えたインターナショナル・サポート・デスク(ISD)を設置し対応している。ISD には専門スタッフを８名配置し、本事業でも、この ISD を利用して留学生に対応する。**

【計画内容】

**本事業は、学部生および大学院を対象とし、かつ全学で推進するプログラムであるため、千葉大学内の留学生課、国際企画課、教育企画課および専門職連携教育実践センター（IPERC)、各学部の学務担当係とGRIP運営委員会を作り進める。**

（1）《留学前》 **留学前には、日本の大学と同じように、連携大学から派遣する学生の選抜を行う。それぞれの大学において、責任を持って選抜し、事前の準備を行う。**選抜された学生には、日本人と同じように、オンラインにより事前学習を履修、同時に専門職間社会課題解決演習（ISL）科目の実施方法とそのゴールを共有する。また、希望があれば半年から１年をかけ履修を遂行することによって、副専攻の学位を得ることができることについても説明し、履修計画を十分に立てることができるように指導する。

（2）《留学中》 日本でISLのフィールドワークを行う学生が、日本人と同様に短期間の留学でも十分に成果のあるものとするため、**自大学および千葉大学でフィールドワークを担当する教員のもとに履修計画を立て、十分に学修成果が上がるようにする。**このように千葉大学、自国の教職員の多面的なサポートにより、安全な生活が送れるようにすることで、より一層の安心感を持って学修できる。また、連携大学との連絡を取り、安心したISL演習を実施する。医療系の学生については希望があれば千葉大学および千葉県の医療施設でのインターンシップを含んだISLを受け入れる。

（3）《留学後》連携大学の学生は、ISLの成果発表会資料およびフィールドワークでの経験からケーススタディシナリオを作成する。これらは**メタバース内での学生および千葉大学・連携大学の教員のワークショップにて共有する。またその際にはケーススタディシナリオのテンプレートを用意し共有しやすいように整備する。**ワークショップは、次に本プログラムに参加を予定している学生への誘いやどのように対応して良いかについてのノウハウを伝授することにつなげる。また**ケーススタディシナリオはメタバース会議室内に蓄積し、参加を検討している学生および教員がいつでも活用**し予習復習ができるようにする。

## ③ 関係大学間の連絡体制の整備

【実績・準備状況】

**プログラムの実施体制については、COVID-19 パンデミック直前まで、現地留学を含む学部科目であるGlobal Health and Nursing II において、各大学と連携を取りながら準備してきた。**シンビオシス国際大学提供の社会課題に関する現地調査を含む 2 週間のプログラムは COVID-19 パンデミックが生じた後も現地とのオンライン双方向のプログラムとして継続してきた。レスター大学とはパンデミック直前まで Global Interprofessional Education としてインターンシップを含む交換留学を行い、またさらに充実したエクスチェンジを行うため、レスター大学は英国政府のファンドを獲得していた。モナシュ大学とは、パンデミック直前の 2020 年 3 月に千葉大学亥鼻 IPE 担当教員が訪問し、お互いのプログラムの相互乗り入れを検

討し、かつモナシュ大学からはIPEに関する動画教材の提供を得ていた。

世界の大学の専門職連携教育拠点は、千葉大学IPERCも含めパンデミックで運営に大きな影響を受け、大規模IPEを対面からオンラインに載せ替えることを余儀なくされたが、そのため、IPEに関する動画コンテンツを、レスター大学もモナシュ大学も千葉大学も多数保有することにつながり、これがGRIPのコンテンツ作成の準備につながっている。

【計画内容】

本事業は、パンデミック後の2020年、2021年も看護学部のGlobal Health and Nursing IIのなかで連携してオンラインプログラムを開発実施してきたシンビオシス国際大学と２校でGRIP科目の中の専門職間社会課題解決演習ISLのフィールド課題の決定とフィールド開発に取り組み、ケーススタディシナリオのプロトタイプを開発する。その後レスター大学及びモナシュ大学を加え連携体制を確立し、Phase 2に移行させる。Phase 2では、インド、英国、オーストラリア、日本各国が普及を目指し、これまでそれぞれの大学で交流のあるいくつかの大学に声をかけGRIPの周知をおこない参加大学を募る予定である。

(1) GRIP科目の構築とJV-Campusなどへの搭載（Phase 1）

GRIPオンライン６科目およびISL事前学習用コンテンツの作成はすでに着手しており、採択後すぐに動画教材およびワークシートなどをJV-Campusにアップする。シンビオシス国際大学と共同で開拓する専門職間社会課題先行プログラムの確定を採択後直ちに実施する。そのために現在実施されているプログラムからの洗練に取り掛かっている。2022年度はオンラインプログラムおよびメタバースの構築を行うとともに、現地会議をシンビオシス国際大学および千葉大学で１度ずつ実施する。現地会議ではISLのフィールド候補のアセスメントと決定についても検討する。

(2)専門職間社会課題解決演習ISLの課題決定（Phase 1から２）

ISLは、社会課題のなかでも持続可能な開発目標３の健康課題を中心に課題リストを作成し、４大学で協議しつつ決定する。また年間２つずつのケーススタディシナリオを作成するためのテンプレートを共有する。医療系学生、文系学生、工学系学生がそれぞれアドバンテージを発揮できるように、参加する学生に公平な学修を保証する教材を作成する。社会課題は現地の医療制度、文化、資源などの特徴からホリスティックなアセスメントが必要であり、現地フィールドの視察を含めた現地会議を学生の留学期間に合わせて実施する予定である。

(3)GRIP運営委員会およびGRIP評価委員会の設置と定期開催（Phase 1から２）

GRIP参加大学によりGRIPのマネジメント、およびカリキュラム評価、学修者評価のための会議体を設置し、機能させる。初年度にはルールの策定と共有を行い、2023年度にはGRIP運営委員会をスタート、2025年にはGRIP評価委員会をスタートさせる。

(4)GRIPの普及（Phase 2）

Phase 2では、４大学以外の大学に普及を試みる。インド、英国、オーストラリア、また台湾などアジアにも普及を行う。それぞれの国の健康関連社会課題とフィールドとしての受け入れ可能性を検討する過程において世界を見つめた単位の国際通用性を検証する。これにより、プログラムの継続性とともに、専門職連携教育及び社会課題解決教育を文化的対応能力と文化的謙虚さを基盤として獲得可能な協働教育プログラムとして確立できるよう貢献する。本プログラムで参加する日本の大学は総合大学としての千葉大学以外に、公立、私立の多様なIPE実施大学および専門学校の参加可能性を確保し、2027年度以降の継続可能性を高める。

## 事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及　【①～②合わせて２ページ以内】

### ① 事業の実施に伴う大学の国際化

【実績・準備状況】

千葉大学では、第四期中期目標において、「海外の大学と連携した国際的な教育プログラムの提供等により、異なる価値観に触れ、国際感覚を持った人材を養成する」と掲げている。本事業で実施するプログラムは、この事項の具体的プログラムである。そして、本事業で実施するプログラムは、社会課題解決スキルを備えた専門職業人を育成するものであるとともに、大学院を中心とした、新たな「文理混合のプログラム」として、全学の学生が参加可能なものである。これは、現在千葉大学が推進しているスーパーグローバル大学創成支援事業「グローバル千葉大学の新生－Rising Chiba University－」と強力に連携しながら進めることができる。

一方千葉大学の大学間協定締結状況（2022 年データ）では、アジア地域では 159 協定あるが、このうち中国が 55、台湾 25 のところ、インドは２である。オセアニア地域では４協定、英国は７である。

【計画内容】

千葉大学の国際化において、インド、英国、オーストラリア地域は、千葉大学の国際化の潜在ニーズを開拓できるものである。したがって今回推進しようとしている事業によりインド、英国、オーストラリアの地域で本事業により交流大学が増えることで大学の国際化において最重要な教育プログラムであり、積極的に大学を挙げて推進していく。

参加大学のある国での現地でのオペレーションは、これまで看護学研究院などで共同プログラム開発を行ってきた特命研究員、大学の OB を活用することを検討している。またとくにインドへのアプローチはこの地域に詳しい留学コーディネイターを活用する。このようにそれぞれの大学の学修カリキュラムをよく熟知した人間がプログラムを実施することによりプログラムの精度を上げるとともに、プログラムの実施のしやすさも実現できる。以上のように 本事業は参加大学にとって有益なプログラムであり、かつ両方の大学の国際化をさらに推進することが可能である。

### ② 国内外への情報提供の方法・体制、成果の普及

【実績・準備状況】

千葉大学では、これまで様々な世界展開力強化事業を実施してきた。そのなかで、最も影響力のある情報提供の方法は、事業対象国の在日公館での広報や事業対象国にある日本大使館からの発信である。本事業でも、各国の大使館に依頼し、事業の広報を実施する。

また事業については、日本語と英語のホームページを、同一のコンテンツで公開している。このトップページにあるグローバルメニューより、スーパーグローバル大学創成支援事業および世界展開力強化事業のページにアクセスできるようになっている。

一方で、教育に関する公開事項である３ポリシー、シラバス、コース・ナンバリング・システム、カリキュラムツリーなどの公開も実施している。過去の世界展開力強化事業のプログラムは、全て英語での情報発信を行っており、ソーシャルネットワークを利用した情報発信、スマートフォン対応による学生への

リアルタイムな情報発信、プログラムにおける学生のディスカッション内容や、動画によるプログラムの紹介などで、プロジェクトの最先端の情報発信を行っている（http://design-cu.jp/code/, http://design-cu.xsrv.jp/puli/）。

また、千葉大学は、グローバル関連プログラムを広く学外に開放している。これまで国立六大学連携コンソーシアム（新潟、金沢、岡山、長崎、熊本と千葉）において、グローバル関連のプログラムをアセアンの大学連合である AUN と共同で開発してきた。これ以外にも、千葉大学が実施する海外派遣プログラムであるグローバル・スタディ・プログラムやグローバル・インターンシップなども他大学に開放し、フィンランド、ギリシャ、マレーシア、ドイツなど世界中でプログラムを実施している。本事業もこれまでのグローバル関連プログラムの延長線上に位置づけ、同様のポリシーでプログラムを開放する。

【計画内容】

本事業も、これまでに実施してきた世界展開力事業と同様、上記の３つの方法、「大使館による情報提供」＋「専用ホームページでの公開」＋「国内外協定大学への公開」、を実施する。インターネットを利用し、英語を第一言語としてホームページを構築していく。そしてさらに重要であると考えているのが、学生への広報である。本プログラムは、コロナ禍における世界展開力強化事業として、これまでとは異なる環境整備が必要である。そのため、日本人学生には、これまでのように派遣を中心として教育研究を行うのではなく、我が国において十分に事前学習を行い、短期間であっても学修効果の高い派遣を実施していくプログラムであることを積極的に広報する。

本事業で実施するプログラムは、学生向けのポータルサイトでその詳細な情報を公開し、積極的に利用する。このポータルサイトは、メディア授業の Moodle とリンクしており、これらを利用して広報を実施する。これらの内容は、千葉大学の学生は閲覧が可能だが、他大学の学生は閲覧ができない。そこで、本事業では、事業採択後 GRIP のホームページを構築し、その中に GRIP 科目の内容を提供したページを作成する。これらは、全て一般に公開されるため、他大学の学生も閲覧できる。なお、連携大学の学生でプログラムの副専攻学位を目指す学生は、千葉大学の学生同様に学生ポータルを利用でき、詳細情報を取得できる。また、千葉大学では、現在 Microsoft Teams と Google Workspace を利用可能としており、GRIP でもこれらを利用する。インターンシップ先の企業等とは、これらのシステムを利用してオンライン・インターンシップを実施することを予定している。

また、学生の利用頻度の高い、ソーシャルネットワークを利用した授業の進行や情報の提供も行っていく。一般的な情報は SNS でも発信し、授業の内容やセキュリティ管理が必要なものについては、学生ポータルや Moodle を用いて実施する。このように、インターネットを最大限に利用して、可能な限りの内容を広報し、魅力あるプログラムであることを訴えることで、成果の普及まで展開していく。

| 交流プログラムを実施する海外相手大学について　【相手大学ごとに①、②合わせて１ページ以内】 | |
|---|---|
| 相手大学名<br>（国名） | シンビオシス国際大学（インド） |

**①　交流実績（交流の背景）**

シンビオシス国際大学とは、同大学看護学部ならびに千葉大学看護学部間にて、2019 年より、国際交流を開始し、本年まで４年間継続して学生の交流プログラムを実施している。

この学生の交流プログラムは、千葉大学看護学部の自由科目である Global Health and Nursing II(2 単位)該当プログラムであり、日本、インドそれぞれにおける社会文化経済的背景と看護・医療との関連を主題とする国際交流プログラムである。2019 年には本学看護学部より、7 名の２，３年次学生が現地に実渡航し、実際に現地の医療機関やシンビオシス国際大学看護学部において、施設見学の他、保健医療システムや看護実践、看護教育の状況について、講義を受け、同大学看護学部教員ならびに学生との意見交換などを行った。特にこのシンビオシス国際大学との交流プログラムでは、インドの伝統医療や ASHA といったコミュニティ・ヘルス・ワーカーが活躍する独自の保健医療システム等について、社会文化経済的背景との関連を実際に見聞し、検討するという学修プログラムとなっている。また、シンビオシス国際大学側にバディとして学生のアシスタントを配置することによって、学生同士が安心して交流を持てる環境を提供しており、プログラム受講学生からも好評であった。学修目標の達成状況も良好であった。

2020 年以降は、COVID-19 拡大により渡航が困難となったが、オンラインでの国際交流プログラムを、1，2 回／年実施し、2020 年には計 9 名、2021 年には計 6 名が受講・修了した。オンラインであっても、上記講義や学生のバディとの意見交換等に加え、伝統的かつ代表的な健康法の一つであるヨガの実践などもあり、充実した内容となった。2022 年前期にもこのオンラインでの国際交流プログラムを実施する予定である。なお、同大学は、本学部のみならず、千葉大学普遍教育課程において他学部学生に向けて国際交流プログラムを提供している。

**②　交流に向けた準備状況**

○　交流プログラムの実施に向けた相手大学との準備（大学ごとの役割・実施体制の明確化等）が十分なされているか。

本事業実施における協働でのプログラム提供や学生交換については、2022 年 2 月頃より、シンビオシス国際大学国際教育センター Symbiosis International Education Centre（SCIE）を通じて、承諾を得ており、3 月には大学間協定締結についても内諾を得ている。現在、同大学ならびに本学間にて、MOU 締結の手続きを進めているところである。

前述の通り、同大学看護学部とは実渡航を伴う学生交流がすでにあり、今後はそれをさらに発展させ、相互に学生を派遣し、世界の多大学と協働での学修プログラム提供に向け、具体的な検討を開始している。

千葉大学看護学部においては、Global Health and Nursing II（GHN2）担当教員が中心とって、同大学 SCIE ならびに看護学部と協働でプログラムを実施する。GHN シンビオシス国際大学は、本 GRIP 事業においては、他大学に先行して最初に専門職間社会課題解決演習 ISL を実施するフィールドとなる。そのため、2022 年度後期には、GHN2 として、同大学の交流プログラムでの実渡航再開を検討しているが、この GHN2 実施時に千葉大学側の担当教員が現地に赴き、シンビオシス国際大学教員ならびに SCIE と打ち合わせなどを行うことを予定している。シンビオシス国際大学での専門職間社会課題解決演習 ISL でのテーマは、例えば、2 の「医療資源へのアクセシビリティ」を想定しており、これまでの学生派遣時の実績を踏まえ、演習施設や地域の選定など準備を開始する。

| 交流プログラムを実施する海外相手大学について　【相手大学ごとに①、②合わせて１ページ以内】 | |
|---|---|
| 相手大学名<br>（国名） | レスター大学（英国） |

**②　交流実績（交流の背景）**

レスター大学は千葉大学医学研究院との間で部局間協定を締結している。2005 年に初めてレスター大学からの教員の訪問があり、その後定期的な交流の機会を持ってきた。**本学の亥鼻 IPE プログラムの企画段階よりレスター大学教員のコンサルテーションを受けつつプログラムを発展させてきた経緯がある。**本学医学部、看護学部、薬学部との合同の IPE 授業の一環として、**本学看護学部からも 2019 年に 4 年次学生２名、医学部６年生１名をチームとして、英国の同大学現地に派遣した。**現地でのプログラムは、日本の包括ケアシステムのモデルともなっている integrated care(統合ケア)について学ぶ、integrated care block(ICB) と呼ばれるカリキュラムであり、本学医学部学生ならびに看護学部学生は、現地の医学生らとともに参加し、講義の聴講および臨床実習を行った。同大学でのこの ICB は、地域で暮らす高齢者や障害者など慢性的で複雑な健康上のニーズを持つ患者を全人的に評価・診療する能力の涵養、地域において多職種チームの一員として効果的に働くために必要な知識・技術・態度を身に付けることなどを目的とする IPE プログラムである。同プログラムには、貧困地域での生活困窮者や路上生活者を支援対象とする診療所での臨地実習も含まれており、社会経済的背景やそれらに関連する政策等についても比較・検討する学修内容となっている。

この ICB でのプログラムは、地域で暮らす住民を対象に複雑的な問題をも含み、全人的に、多職種チームでのアセスメント・診療能力を涵養するものであり、まさに本事業の基盤であり、プロトタイプとでも呼べるものである。

2020 年以降は COVID-19 パンデミックにて本プログラムは保留となっているが、今後、COVID-19 パンデミック収束とともに、本事業の一部として、再開することとして、レスター大学ならびに IPERC を中心とした亥鼻 IPE 関係者にて準備を進めている。

**② 交流に向けた準備状況**

○　交流プログラムの実施に向けた相手大学との準備（大学ごとの役割・実施体制の明確化等）が十分なされているか。

本事業実施における協働でのプログラム提供や学生交換の基盤となる協定は、すでに医学部間での協定がある。

IPERC を中心として、2023 年度からの本 GRIP 事業としての学生派遣に備え、2022 年度より事前の打ち合わせを開始する。レスター大学の役割は、これまでの上記 ICB カリキュラムを発展させた形で、本 GRIP 事業のフィールドおよびフィールドワークを提供することである。本 GRIP 事業においては、2023 年より、専門職間社会課題解決演習 ISL のうち、例えば 5 の「ホームレスネスと社会」として前述のホームレスシェルターおよび同診療所をフィールドして学生が実習できるように、準備し、学生の学修指導を行う。

本 GRIP 事業実施については、本学 IPERC 担当教員およびレスター大学のグローバル IPE 担当者間にてすでに合意が得られており、現在、具体的な検討を進めているところである。

| 交流プログラムを実施する海外相手大学について　【相手大学ごとに①、②合わせて１ページ以内】 | |
|---|---|
| 相手大学名<br>（国名） | モナシュ大学（オーストラリア） |

**③　交流実績（交流の背景）**

モナシュ大学は、1994 年より、千葉大学との間で大学間協定を締結している。また本学専門職連携教育研究センターの教員は、モナシュ大学 IPE プログラムの視察のため初めて 2012 年に訪問し、その際にスチューデント・クリニック、デジタル診療および E ラーニングシステムなどアイデアを得て亥鼻 IPE プログラムの改善を図った経緯がある。

また、2020 年にグローバル IPE の一環として、IPERC が中心となって 3 名程度の派遣および受け入れを検討合意し、そのためのプログラムも開発していたが、COVID-19 パンデミックにて中止となった。その結果、これまで直接的な派遣・受け入れ等の実績はないが、**グローバル IPE のみならず Global Health and Nursing II の授業の一環として、同大学教員によるオーストラリアにおける看護活動等について、オンデマンド講演などを行っていただいており、本学学部生や大学院生が受講したという実績がある。**

**② 交流に向けた準備状況**

○　交流プログラムの実施に向けた相手大学との準備（大学ごとの役割・実施体制の明確化等）が十分なされているか。

本事業実施における協働でのプログラム提供や学生交換については、内諾が得られており、実施に向けて準備を開始した。

IPERC を中心として、2024 年度からの本 GRIP 事業としての学生派遣に備え、2022 年度より事前の打ち合わせを開始する。モナシュ大学の役割は、本 GRIP 事業のフィールドおよびフィールドワークを提供することである。本 GRIP 事業においては、2024 年より、専門職間社会課題解決演習 ISL のうち、例えば、2 の「医療資源へのアクセシビリティ」として、その広大な国土・大地において、遠隔医療テクノロジーや活用した医療やプライマリヘルスケアの提供等について学修するフィールドの提供を想定している。

本 GRIP 事業実施については、本学 IPERC 担当教員およびモナシュ大学のグローバル IPE 担当者間にて、2022 年は概要の検討、2023 年には先行するインド、英国での状況も反映し、2024 年から実際にフィールドワーク提供を開始する。

**事業計画の実現性、事業の発展性**　【①は１ページ以内、②、③、④は合わせて３ページ以内】

**①　年度別実施計画**

【2022 年度（申請時の準備状況も記載）】Phase1　Step1

採択前より、プログラム開発に関する話し合いをそれぞれ行っている。メタバースおよびオンライン授業システムの構築とコンテンツ搭載準備を行っている。**採択後ただちにコンテンツについては公開準備を行う。現在シンビオシス国際大学と大学間協定締結に向けた最終調整を行っており、担当者が６月来日予定である。**10 月から 12 月は副専攻 GRIP 科目設置、ケーススタディシナリオプロトタイプ準備、1 月千葉大学がインドシンビオシス国際大学訪問、プログラム委員会設置準備、教育の質保証の仕組みづくりを実施する。2 月から 3 月はメタバースにおけるワークショップのトライアルを行い、課題の洗い出しと改善を行う。

【2023 年度】Phase1　Step2

**ISL トライアルをスタートさせるために、インド、英国、日本での社会課題の選定をおこない、GRIP 科目を完成させる。**4 月参加学生募集、同時に英国、オーストラリアの社会課題の選定の会議を開催する。6 月より副専攻 GRIP4 科目開講、ISL 開講準備確認、9 月 GRIP4 科目、ISL オープン、2 月から 3 月で ISL インドと日本でそれぞれ 1 プログラムずつ実施し、3 月メタバースによる成果発表会とケーススタディシナリオの共有を行う。この一連のプロセスをプログラム運営委員会で評価し課題の明確化と改善案を確定する。3 月副専攻 GRIP 完全開講予定。またメタバース内成果発表会に国内 IPE 実施大学を招待し、国内での普及をスタートさせる。

【2024 年度】Phase2　Step3

**4 大学以外の大学に普及を試みる。**インド、英国、オーストラリア、また台湾などアジアにも普及を行う。それぞれの国の健康関連社会課題とフィールドとしての受け入れ可能性を検討する過程において世界を見つめた単位の国際通用性を検証する。そのために国外連携大学および外部評価委員を含めたプログラム評価委員会の設置準備を行いつつ、実施可能性の高い大学を選定し普及を展開する。**4 月ドイツ（ライプチヒ大学）、アメリカ（シンシナティ大学）、台湾（台北医学大学）、北アイルランド（アルスター大学）、オーストラリア（シドニー大学）、ベトナム（ハノイ大学）を候補とし**情報提供開始、7 月参加候補大学での学生リクルートスタート、9 月事前学習スタート、10 月課題選定、1 月から 3 月 ISL 実施、3 月成果発表会、プログラム評価委員会を開催する。

【2025 年度】Phase2　Step4

**4 大学以外の大学に普及を試みる。**インド、英国、オーストラリア、また台湾などアジアにも普及を行う。それぞれの国の健康関連社会課題とフィールドとしての受け入れ可能性を検討する過程において世界を見つめた単位の国際通用性を検証する。そのために国外連携大学および外部評価委員を含めたプログラム評価委員会の設置準備を行いつつ、実施可能性の高い大学を選定し普及を展開する。4 月ドイツ（ライプチヒ大学）、アメリカ（シンシナティ大学）、台湾（台北医学大学）、北アイルランド（アルスター大学）、オーストラリア（シドニー大学）、ベトナム（ハノイ大学）を候補とし情報提供開始、7 月参加候補大学での学生リクルートスタート、9 月事前学習スタート、10 月課題選定、1 月から 3 月 ISL 実施、3 月成果発表会、プログラム評価委員会開催。社会解決フォローアップスタディをスタートさせる。

【2026 年度】Phase2　Step5

**2025 年度と同様に GRIP を展開しつつ、最終年度評価を行い、それぞれの国の健康関連社会課題とフィールドとしての受け入れ可能性を検討する過程において世界を見つめた単位の国際通用性を検証する。**これにより、プログラムの継続性とともに、専門職連携教育及び社会課題解決教育を文化的対応能力と文化的謙虚さを基盤として獲得可能な協働教育プログラムとして確立できるよう貢献する。本プログラムで参加する日本の大学は総合大学としての千葉大学以外に、公立、私立の多様な IPE 実施大学および専門学校の参加可能性を確保し、2027 年度以降の継続可能性を高める。4 月から 10 月 GRIP 最終報告書に向けたデータ収集と分析を行う。同時に GRIP プログラムを実施する。3 月成果発表会を実施する。

**② 交流プログラムの質の向上のための評価体制**

本事業はの交流プログラムの質の評価のために学修者評価、プログラム評価および教学 IR、運営評価の 3 つの視点での評価体制を GRIP プログラム評価委員会として構築する。

(1)GRIP 学修者評価：評価対象は GRIP 参加学生の、**活動、最終レポート、開発されたケーススタディシナリオ、専門職連携実践能力、社会課題開発能力、文化的対応能力及び文化的謙虚さである。**評価者は GRIP 担当教員ではない中立的な立場の教員による学生インタビュー、アンケートの実施と担当教員による学生の提出物の精査で行う。**学修者評価結果は本学の IR 担当者と共同で分析し、経年的にまとめ蓄積し、下記にのべる GRIP プログラム評価に活用していく。**GRIP プログラム評価委員会の下部組織として GRIP 学修者評価ワーキングを位置づける。

(2)GRIP プログラム評価：GRIP プログラム評価委員会の構成は**①千葉大学 IPERC および関連学部の教員職員および IR 担当者を構成員とする大学内評価委員会②参加大学を構成員とする GRIP 参加大学評価委員会の 2 種類を想定する。**①は Phase1 から開設し 1 年間に 3 回程度の開催を目標とし、評価に必要な項目の策定、評価方法、評価者などを検討しルール作りをしていく。②は年に 1 度開催をめどに、①で策定した評価項目、評価方法、評価時期などを合意し、評価データの分析からプログラムの質向上に向けた課題と方策の提案を行うための委員会とする。この際、**GRIP 科目の中の ISL については、各フィールドの住民、アテンドしてくれた各国の専門職からのフィードバックを含むこととし、サービスラーニングに必須の当事者評価を組み込み、社会的インパクトに関しても考察していく。**

(3)GRIP 運営評価：**千葉大学内の GRIP 運営については、千葉大学運営協議会において実施する。また GRIP 運営委員会を開設し、プログラム運営に必要な資源獲得およびマネジメントについて検討する。**国内の外部評価委員による評価（6 名で構成し、IPE と SDG s に関する有識者からなる）、担当者評価などによりデータを収集し多面的に検討する。海外参加大学全体で行う運営評価委員会を年に一度開催し、プログラムの質の評価と改善を実施する。

**③ 補助期間終了後の事業展開**

千葉大学は、令和 2 年度より ENGINE プランで全員留学を実施している。大学院学生も全員留学を実施しているため、本プログラムに参加することで留学となる。したがって補助期間終了後も、そこで構築された副専攻学位のプログラムを中心に継続的に実施する。

●大学院国際実践教育に専門職連携にフォーカスした GRIP 科目を設置する。

**本事業で実施する地域ケア創生人材 IPE プラス（GRIP）は、日本では初めての健康に焦点を当てた専門職連携教育・実践に関連した大学院副専攻学位プログラムとなる。**これを本学の大学院グローバルプログラムである大学院国際実践教育の一つとして位置付けることにより、補助期間終了後も、大学院国際実践教育の副専攻学位として、大学が責任を持って実施する。このプログラムが継続的に実施されることにより、**千葉大学で亥鼻 IPE を必修で受けた医学部、看護学部、薬学部、工学部医工学科の学生は、大学院において継続的かつ医療に特化しない広い意味での健康関連社会課題の解決に向けた専門職連携教育・実践学を学修する機会を得る。**また**医療系ではない学生は、GRIP の受講により、専門職連携教育の究極の目的である「サービス利用者の福利向上のための最高品質のケアを創造するための教育」をオンライン、メタバース、現地演習を組み合わせ効果的効率的に学修する機会となる。**双方の学生が学びあうことにより、地域ケア

を創造するために知恵を出し合えるネットワークが形成される。

●ENGINE プラン

海外留学に関わるプログラムは、令和２年度より開始した全員留学を伴う ENGINE プランの一部に必ず位置づけられる。本プログラムでの留学は大学院における留学の認定となり、修了の要件である留学を本プログラムに参加することによって実施することができる。この ENGINE プランにおいては渡航に関する支援があるため、プログラムを自主的に実施するとともに学生の支援も実施することができる。

このように大学が支援することにより補助期間終了後もプログラムを円滑に推進できる。

●副専攻の共同学位から主専攻の共同学位の設置に向けた検討

GRIP の副専攻プログラムを設置するにあたり、将来的には参加大学で共同学位の授与を検討していく。これは国内においては初の試みになる可能性があり、大学の学位プログラムのあり方についても様々な検討ができると考えられる。

●スマート・ハイブリッド・グローバル IPE・プログラム

プログラムの多くをメディアによる授業として実施できるように構築していく。これは現在の専門職連携教育（IPE）における世界的潮流であり、異なる大学間で効率的な教育を行うための様々な工夫がなされている。つまり COVID-19 のパンデミックにより、これまでの大規模 IPE の弱点であった大人数学生への学習・教育ロジスティクスの構築、経験学習の質の均てん化、学修者評価の難しさが、メディア授業とオンライン双方向グループワーク手法の導入により解決の方向に向かったのである。しかし、千葉大学亥鼻 IPE 受講学生の授業評価からはグループワーク授業対面化の要望もあることも把握している。よって、すべてをメディアにするのではなくメディアによる授業は予習的な意味として位置づけ、学生が事前に最大限に学習することを目標にプログラムを構築していく。このように、スマートラーニングと、逆に現地に行かなければわからない健康関連の社会課題の解決という全く異なる２つのプログラムの組み合わせによって、真にハイブリットなプログラムを構築することができる。

●学部学生、修士、博士学生の学生相互の強力なネットワーク化

学部学生と博士課程の学生がお互いに学びあうスチューデント・チュートリアル・システム（STS）は、単に学習だけではなく、学生同士のコミュニケーションを向上させる。ここで培われたコミュニケーション・ネットワークを利用して、継続的な学生のネットワークを構築できる。さらには、これらの学生が世界保健機関や世界看護師協会、国連、NGO などでインターンシップを経験できるようにし、かつ就職していくことで、GRIP は社会課題解決能力を備えた専門職業人ネットワークの形成基盤として機能することが可能となる。

**④ 補助期間終了後の事業展開に向けた資金計画**

本事業は、医療系学部研究科が参加しやすくかつ医療系以外の学部研究科にとっては健康関連の社会課題の解決方法を専門職連携教育とともに学ぶことができるため、全員留学を推進する千葉大学にとって、必須のプログラムである。そのため**可能な限り反転授業、オンライン授業、スマートラーニングを駆使した学習のプロトタイプを構築し、短期の留学で学修成果を上げることも目指す。そのため、補助期間中から積極的に大学の教育のための学長裁量の教育経費を投入して運営する予定である。**

したがって資金計画は、**（1）学長裁量の教育経費、（2）教育奨学寄附金、（3）共同研究や寄附講座、（4）教育寄附金（SEEDS 基金等）、（5）その他、**を想定している。

下記は、あくまでも概算であるが、年間 10,000 千円前後を目標に資金を獲得し継続させる。

（1）学長裁量の教育経費 3,000～6,000 千円

学長裁量経費を利用し、大学院国際実践プログラムによる副専攻学位プログラムを推進させる経費を継続的に投入する。これは、補助期間中も自己資本として投入しているものを継続的に利用する。

また、教員や職員が継続的に必要な場合は、この教育経費とは別に特別な人件費を計上していく。

（2）教育奨学寄附金 0 円～3,000 千円

奨学寄附金は、基本的には学生の支援に利用する。主に修士および博士の研究への支援とする。

（3）共同研究や寄附講座 0 円～15,000 千円

プロジェクトの進行過程では新たな社会課題の解決に必要な技術が不可欠となる。可能であれば、寄附講座として大学に寄贈してもらい、それを継続する。寄附講座は、専門研究員を 1 名から複数名雇用できる規模とし、あまり大きくせず実施する。共同研究の実施など、年度更新が不可能な部分を補填する意味で、継続的な雇用を寄附講座で実現したい。

(算出根拠) 1 研究テーマあたり、3,000 千円×年間 0 件～ 5 件程度＝0～15,000 千円

（4）教育寄附金（SEEDS 基金等） 0～10,000 千円

千葉大学寄附金である SEED 基金から、学生の留学に関する支援を行ってもらう。補助期間中も必要に応じて、教育寄附金（SEEDS 基金）を用いて学生を渡航させる。

（5）その他 0～12,000 千円

本プログラムの一部を、ショート・プログラムとして海外の大学に提供し、授業料収入を得る。（算出根拠） 1 プログラム 4,000 千円×0～3 プログラム＝0～12,000 千円

以上をまとめると、最低 3,000 千円～最高 46,000 千円の収入が可能であると計画でき、十分な事業展開が可能であると考える。なお本予算は、中間評価までに精査し、事業化の可能性により上下させて計画していく。

様式7

## 補助期間における各経費の明細【年度ごとに1ページ】

補助金申請ができる経費は、当該事業の遂行に必要な経費であり、本プログラムの目的である大学の世界展開力強化のための使途に限定されます。
（令和４年度大学の世界展開力強化事業公募要領参照。）

（単位：千円）

| ＜2022年度＞　経　費　区　分 | 補助金申請額（①） | 大学負担額（②） | 事業規模（総事業費）（①＋②） | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| ［物品費］ | 1,724 | | 1,724 | |
| ①設備備品費 | 1,500 | | 1,500 | |
| ・メタバースプラットフォームサーバー用モニター | 600 | | 600 | |
| ・メタバースプラットフォームサーバー関係 | 800 | | 800 | |
| ・無停電電源装置 | 100 | | 100 | |
| ・ | | | | |
| ②消耗品費 | 224 | | 224 | |
| ・活動記録用360°カメラ | 60 | | 60 | |
| ・事務用品等 | 164 | | 164 | |
| ・ | | | | |
| ［人件費・謝金］ | 7,516 | | 7,516 | |
| ①人件費 | 7,100 | | 7,100 | |
| ・プログラムコーディネーター（特任講師） | 4,700 | | 4,700 | 雇用期間：7月 |
| ・事務補佐員 | 2,400 | | 2,400 | 雇用期間：7月 |
| ・ | | | | |
| ②謝金 | 416 | | 416 | |
| ・非常勤講師謝金　@6,500円×5ｈ×8人 | 260 | | 260 | |
| ・外国招聘教員講演　@6,500円×3ｈ×8人 | 156 | | 156 | |
| ・ | | | | |
| ［旅費］ | 4,200 | | 4,200 | |
| ・シンビオシス国際大学との打合せ等<br>打合せ：@300千円×6人、学生引率：@400千円×2人 | 2,600 | | 2,600 | |
| ・レスター大学との打合せ　@400千円×2人 | 800 | | 800 | |
| ・モナシュ大学との打合せ　@400千円×2人 | 800 | | 800 | |
| ・ | | | | |
| ［その他］ | 6,560 | 2,000 | 8,560 | |
| ①外注費 | 1,400 | 2,000 | 3,400 | |
| ・メタバースプラットフォーム専用レイアウト作成 | 200 | | 200 | |
| ・webサイト作成 | | 2,000 | 2,000 | |
| ・プロジェクトVTR制作 | 1,200 | | 1,200 | |
| ②印刷製本費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ③会議費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ④通信運搬費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ⑤光熱水料 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ⑥その他（諸経費） | 5,160 | | 5,160 | |
| ・交流大学とのコーディネートに係る外部委託費 | 1,000 | | 1,000 | |
| ・メタバースプラットフォーム年間契約 | 160 | | 160 | 契約期間：７月 |
| ・学生派遣支援　@200千円×10人 | 2,000 | | 2,000 | |
| ・学生受入支援　@200千円×10人 | 2,000 | | 2,000 | |
| ・ | | | | |
| 2022年度　合計 | 20,000 | 2,000 | 22,000 | |

（大学名：　千葉大学　　）　（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

（前ページの続き）　（単位：千円）

| ＜2023年度＞　経　費　区　分 | 補助金申請額（①） | 大学負担額（②） | 事業規模（総事業費）（①＋②） | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| ［物品費］ | 119 | | 119 | |
| ①設備備品費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ②消耗品費 | 119 | | 119 | |
| ・事務用品等 | 119 | | 119 | |
| ・ | | | | |
| ［人件費・謝金］ | 8,416 | 4,000 | 12,416 | |
| ①人件費 | 8,000 | 4,000 | 12,000 | |
| ・プログラムコーディネーター（特任講師） | 8,000 | | 8,000 | |
| ・事務補佐員 | | 4,000 | 4,000 | |
| ・ | | | | |
| ②謝金 | 416 | | 416 | |
| ・非常勤講師謝金　@6,500円×5ｈ×8人 | 260 | | 260 | |
| ・外国招聘教員講演　@6,500円×3ｈ×8人 | 156 | | 156 | |
| ・ | | | | |
| ［旅費］ | 2,800 | | 2,800 | |
| ・プログラム参加学生引率のための外国旅費 | | | | |
| 交流大学（モナシュ大学を除く）からシンビオシス国際大学への外国旅費 @400千円×3人 | 1,200 | | 1,200 | |
| 交流大学（モナシュ大学を除く）から本学への外国旅費 @400千円×2人 | 800 | | 800 | |
| ・モナシュ大学との打合せ　@400千円×2人 | 800 | | 800 | |
| ［その他］ | 6,665 | | 6,665 | |
| ①外注費 | 500 | | 500 | |
| ・webサイトメンテナンス費 | 500 | | 500 | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ②印刷製本費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ③会議費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ④通信運搬費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ⑤光熱水料 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ⑥その他（諸経費） | 6,165 | | 6,165 | |
| ・交流大学とのコーディネートに係る外部委託費 | 500 | | 500 | |
| ・メタバースプラットフォーム年間契約 | 265 | | 265 | |
| ・学生派遣支援　@180千円×15人 | 2,700 | | 2,700 | |
| ・学生受入支援　@180千円×15人 | 2,700 | | 2,700 | |
| ・ | | | | |
| 2023年度　合計 | 18,000 | 4,000 | 22,000 | |

（大学名：　千葉大学　）　（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

（前ページの続き）　（単位：千円）

| ＜2024年度＞　経　費　区　分 | 補助金申請額（①） | 大学負担額（②） | 事業規模（総事業費）（①＋②） | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| ［物品費］ | 84 | 35 | 119 | |
| ①設備備品費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ②消耗品費 | 84 | 35 | 119 | |
| ・事務用品等 | 84 | 35 | 119 | |
| ・ | | | | |
| ［人件費・謝金］ | 8,416 | 4,000 | 12,416 | |
| ①人件費 | 8,000 | 4,000 | 12,000 | |
| ・プログラムコーディネーター（特任講師） | 8,000 | | 8,000 | |
| ・事務補佐員 | | 4,000 | 4,000 | |
| ・ | | | | |
| ②謝金 | 416 | | 416 | |
| ・非常勤講師謝金　@6,500円×5ｈ×8人 | 260 | | 260 | |
| ・外国招聘教員講演　@6,500円×3ｈ×8人 | 156 | | 156 | |
| ・ | | | | |
| ［旅費］ | 1,600 | 1,200 | 2,800 | |
| ・プログラム参加学生引率のための外国旅費 | | | | |
| 交流大学からシンビオシス国際大学への外国旅費 @400千円×4人 | 1,600 | | 1,600 | |
| 交流大学から本学への外国旅費 @400千円×3人 | | 1,200 | 1,200 | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ［その他］ | 6,100 | 565 | 6,665 | |
| ①外注費 | | 300 | 300 | |
| ・webサイトメンテナンス費 | | 300 | 300 | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ②印刷製本費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ③会議費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ④通信運搬費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ⑤光熱水料 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ⑥その他（諸経費） | 6,100 | 265 | 6,365 | |
| ・交流大学とのコーディネートに係る外部委託費 | 500 | | 500 | |
| ・メタバースプラットフォーム年間契約 | | 265 | 265 | |
| ・学生派遣支援　@140千円×20人 | 2,800 | | 2,800 | |
| ・学生受入支援　@140千円×20人 | 2,800 | | 2,800 | |
| ・ | | | | |
| 2024年度　合計 | 16,200 | 5,800 | 22,000 | |

（大学名：　千葉大学　）　（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

（前ページの続き）　（単位：千円）

| ＜2025年度＞　経　費　区　分 | 補助金申請額（①） | 大学負担額（②） | 事業規模（総事業費）（①＋②） | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| ［物品費］ | 19 | | 19 | |
| ①設備備品費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ②消耗品費 | 19 | | 19 | |
| ・事務用品 | 19 | | 19 | |
| ・ | | | | |
| ［人件費・謝金］ | 8,416 | 4,000 | 12,416 | |
| ①人件費 | 8,000 | 4,000 | 12,000 | |
| ・プログラムコーディネーター（特任講師） | 8,000 | | 8,000 | |
| ・事務補佐員 | | 4,000 | 4,000 | |
| ・ | | | | |
| ②謝金 | 416 | | 416 | |
| ・非常勤講師謝金　@6,500円×5ｈ×8人 | 260 | | 260 | |
| ・外国招聘教員講演　@6,500円×3ｈ×8人 | 156 | | 156 | |
| ・ | | | | |
| ［旅費］ | | 2,800 | 2,800 | |
| ・プログラム参加学生引率のための外国旅費 | | | | |
| 交流大学からシンビオシス国際大学への外国旅費 @400千円×4人 | | 1,600 | 1,600 | |
| 交流大学から本学への外国旅費 @400千円×3人 | | 1,200 | 1,200 | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ［その他］ | 6,145 | 620 | 6,765 | |
| ①外注費 | | 300 | 300 | |
| ・webサイトメンテナンス費 | | 300 | 300 | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ②印刷製本費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ③会議費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ④通信運搬費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ⑤光熱水料 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ⑥その他（諸経費） | 6,145 | 320 | 6,465 | |
| ・交流大学とのコーディネートに係る外部委託費 | 445 | 55 | 500 | |
| ・メタバースプラットフォーム年間契約 | | 265 | 265 | |
| ・学生派遣支援　@95千円×30人 | 2,850 | | 2,850 | |
| ・学生受入支援　@95千円×30人 | 2,850 | | 2,850 | |
| ・ | | | | |
| 2025年度　合計 | 14,580 | 7,420 | 22,000 | |

（大学名：　千葉大学　）　（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

（前ページの続き）　　（単位：千円）

| ＜2026年度＞　経　費　区　分 | 補助金申請額（①） | 大学負担額（②） | 事業規模（総事業費）（①＋②） | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| ［物品費］ | 12 | 107 | 119 | |
| ①設備備品費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ②消耗品費 | 12 | 107 | 119 | |
| ・事務用品等 | 12 | 107 | 119 | |
| ・ | | | | |
| ［人件費・謝金］ | 8,000 | 4,416 | 12,416 | |
| ①人件費 | 8,000 | 4,000 | 12,000 | |
| ・プログラムコーディネーター（特任講師） | 8,000 | | 8,000 | |
| ・事務補佐員 | | 4,000 | 4,000 | |
| ・ | | | | |
| ②謝金 | | 416 | 416 | |
| ・非常勤講師謝金　@6,500円×5ｈ×8人 | | 260 | 260 | |
| ・外国招聘教員講演　@6,500円×3ｈ×8人 | | 156 | 156 | |
| ・ | | | | |
| ［旅費］ | | 2,800 | 2,800 | |
| ・プログラム参加学生引率のための外国旅費 | | | | |
| 交流大学からシンビオシス国際大学への外国旅費 @400千円×4人 | | 1,600 | 1,600 | |
| 交流大学から本学への外国旅費 @400千円×3人 | | 1,200 | 1,200 | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ［その他］ | 5,110 | 1,555 | 6,665 | |
| ①外注費 | | 300 | 300 | |
| ・webサイトメンテナンス費 | | 300 | 300 | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ②印刷製本費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ③会議費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ④通信運搬費 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ⑤光熱水料 | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ・ | | | | |
| ⑥その他（諸経費） | 5,110 | 1,255 | 6,365 | |
| ・交流大学とのコーディネートに係る外部委託費 | | 500 | 500 | |
| ・メタバースプラットフォーム年間契約 | | 265 | 265 | |
| ・学生派遣支援　@70千円×40人 | 2,800 | | 2,800 | |
| ・学生受入支援　@70千円×40人 | 2,310 | 490 | 2,800 | |
| ・ | | | | |
| 2026年度　合計 | 13,122 | 8,878 | 22,000 | |

（大学名：　千葉大学　　）　（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　　）

様式８

## 海外相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて２ページ以内】

### ①交流プログラムを実施する相手大学の概要

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大学名称 | （日）シンビオシス国際大学<br>（英）Symbiosis Ineternaional(Deemed University) | | 国名 | インド | |
| 設置形態 | Deemed to be University | 設置年 | 2002 | | |
| 設置者（学長等） | Dr. S B Mujumdar | | | | |
| 学部等の構成 | Faculty of Law, Faculty of Management, Faculty of Computer Science, Faculty of Health Science, Faculty of Media and Communication, Faculty of Humanities and Social Sciences, Faculty of Engineering, Faculty of Architecture and Design | | | | |
| 学生数 | 総数 | 22,460人 | 学部生数 | 14,893人 | 大学院生数 7,373人 |
| 受け入れている留学生数 | 983人 | 日本からの留学生数 | 不明 | | |
| 海外への派遣学生数 | 180人 | 日本への派遣学生数 | 0人 | | |
| Webサイト（URL） | https://siu.edu.in/ | | | | |

### ②記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。

IAU (International Association of Universities)のWHED (World Higher Education Database) の掲載大学である。リンク：https://www.whed.net/results_institutions.php

以下、掲載頁の画像：全体（左）ならびに概要部分の拡大（右）

（大学名： 千葉大学　　）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア　　）

| ③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。 |
| --- |
| |

（大学名： 千葉大学　　）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア　　）

様式８

## 海外相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて２ページ以内】

### ①交流プログラムを実施する相手大学の概要

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大学名称 | （日）レスター大学<br>（英）University of Leicester | | 国名 | 英国 | |
| 設置形態 | 国立大学 | 設置年 | 1921 | | |
| 設置者（学長等） | David Willetts（大学総長） | | | | |
| 学部等の構成 | 社会学、人文科学、医学、生物科学、心理学、理学、工学など40学部 | | | | |
| 学生数 | 総数 | 20,000人 | 学部生数 | 18,000人 | 大学院生数 2,000人 |
| 受け入れている留学生数 | 年間2,900人 | 日本からの留学生数 | 不明 | | |
| 海外への派遣学生数 | 不明 | 日本への派遣学生数 | 不明 | | |
| Ｗｅｂサイト（ＵＲＬ） | https://le.ac.uk/ | | | | |

### ②記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。

IAU (International Association of Universities)のWHED (World Higher Education Database) の掲載大学である。リンク：https://www.whed.net/results_institutions.php
　以下、掲載頁の画像：全体（左）ならびに概要部分の拡大（右）

（大学名： 千葉大学　　）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア　　）

| ③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。 |
| --- |
| |

（大学名： 千葉大学　　）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア　　）

様式８

## 海外相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて２ページ以内】

### ①交流プログラムを実施する相手大学の概要

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大学名称 | （日）モナシュ大学<br>（英）Monash University | | | 国名 | オーストラリア |
| 設置形態 | 公立 | 設置年 | | 1958 | |
| 設置者（学長等） | Alan Finkel大学総長 | | | | |
| 学部等の構成 | Business and Economics、Faculty of Education、Faculty of Engineering、Faculty of Information Technology、Faculty of Law、Faculty of Medicine, Nursing and Health Sciences、Faculty of Pharmacy and Pharmaceutical Sciences、Faculty of Science | | | | |
| 学生数 | 総数 | 86,000人 | 学部生数 | 55,000人 | 大学院生数 36,000人 |
| 受け入れている留学生数 | 29,900人 | 日本からの留学生数 | 不明 | | |
| 海外への派遣学生数 | 不明 | 日本への派遣学生数 | 不明 | | |
| Ｗｅｂサイト（ＵＲＬ） | https://www.monash.edu/ | | | | |

### ②記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。

IAU (International Association of Universities)のWHED (World Higher Education Database）の掲載大学である。リンク：https://www.whed.net/results_institutions.php

以下、掲載頁の画像：全体（左）ならびに概要部分の拡大（右）

（大学名： 千葉大学　　）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア　　）

| ③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。 |
| --- |
| |

（大学名： 千葉大学　　）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア　　）

様式９

参考データ【国内の大学等１校につき、①～③は枠内に記入、④～⑥はそれぞれ指定ページ以内】
※人数等の算定に当たっては、原則として「学校基本調査」による定義に基づき記入。

| 大学等名 | 千葉大学 |
|---|---|

## ①大学等全体における出身国別の留学生の受入総数（2019年５月１日現在）及び各出身国（地域）別の2019年度の留学生受入人数

※「留学生」とは、「出入国管理及び難民認定法」別表１に定める「留学」の在留資格を有する者に限る。
※「2019年度受入人数」は、2019年４月１日～2020年３月３１日の出身国（地域）別受入人数を記入。
※「全学生数」には、日本人学生及び外国人留学生を含めた大学等全体の2019年5月1日現在の在籍者数を記入。

| 順位 | 出身国（地域） | 受入総数 | 2019 年度<br>受入人数 |
|---|---|---|---|
| 1 | 中国 | 632 | 882 |
| 2 | 韓国 | 101 | 125 |
| 3 | 台湾 | 48 | 79 |
| 4 | インドネシア | 42 | 50 |
| 5 | タイ | 30 | 38 |
| 6 | メキシコ | 18 | 27 |
| 7 | モンゴル | 10 | 11 |
| 8 | カンボジア | 10 | 11 |
| 9 | ドイツ | 10 | 24 |
| 10 | マレーシア | 8 | 11 |
| その他<br>（上記１０カ国以外） | （主な国名） イタリア、ミャンマー等 | 107 | 165 |
| 留学生の受入人数の合計 | | 1016 | 1423 |
| 全学生数 | | 14513 | |
| 留学生比率 | | 7.0% | |

## ②2019年度中に留学した日本人学生数及び派遣先大学合計校数

※教育又は研究等を目的として、2019年度中（2019年４月１日から2020年３月３１日まで）に海外の大学等（海外に所在する日本の大学等の分校は除く。）に留学した日本人学生について記入。
なお、2019年３月３１日以前から継続して留学している者は含まない。

| 順位 | 派遣先大学の所在国<br>（地域） | 派遣先大学名 | 2019年度<br>派遣人数 |
|---|---|---|---|
| 1 | アメリカ | アラバマ大学（タスカルーサ校） | 52 |
| 2 | タイ | マヒドン大学 | 48 |
| 3 | フィンランド | ラップランド大学 | 32 |
| 4 | オーストラリア | モナシュ大学 | 30 |
| 5 | イギリス | ヨーク大学 | 24 |
| 6 | イギリス | ボーンマス美術大学 | 24 |
| 7 | 韓国 | ソウル国立大学 | 20 |
| 8 | タイ | チェンマイ大学 | 18 |
| 9 | タイ | チュラロンコーン大学 | 11 |
| 10 | アメリカ,インドネシア,メキシコ | アラバマ大学（バーミングハム校）,インドネシア大学,モンテレイ大学 | 30 ※各校10名 |
| その他<br>（上記１０カ国以外） | （主な国名） ドイツ,台湾,中国<br>計 47 カ国 | （主な大学名）シャリテ・ベルリン医科大学<br>計 229 校 | 542 |
| 派遣先大学合計校数 | | 241 | |
| 派遣人数の合計 | | | 831 |

（大学名： 千葉大学 ）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア ）

様式９

| 大学等名 | 千葉大学 |
|---|---|

③大学等全体における外国人教員数（兼務者を含む）（2022年５月１日現在）

※「全教員数」には大学等に在籍する日本人教員も含めた全教員数を記入。
※「うち専任教員（本務者）数」には教授、准教授、講師、助教、助手の専任の外国人教員の数をそれぞれ記入。
（いずれにも当てはまらない場合には、「助手」に含めること。）

| 全教員数 | 外国人教員数 | | | | | | 外国人教員の比率 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 教授 | 准教授 | 講師 | 助教 | 助手 | 合計 | |
| 2503 | 11 | 15 | 72 | 63 | 0 | 161 | 6.4% |
| うち専任教員（本務者）数 | 8 | 14 | 15 | 32 | 0 | 69 | |

※全教員数については集計中のため未確定。

（大学名：　千葉大学　）（主な交流先：　英国・インド・オーストラリア　）

| 大学等名 | 千葉大学 |
|---|---|

## ④取組の実績　【4ページ以内】

○国際的な教育環境の構築に関して、本学では、インドネシア、韓国、タイ、台湾、中国及びドイツの6ヶ国24大学との間で34のダブルディグリー・プログラムを実施している。

【ダブル・ディグリープログラム一覧】

| 国名 | No. | 相手先大学名・部局名 | 千葉大学部局名 | 学位 | | 協定締結年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 修士 | 博士 | |
| インドネシア | 1 | IPB大学（ボゴール農科大学）<br>大学院 | 園芸学研究科 | ○ | | 2009 |
| | 2 | インドネシア大学<br>工学部、理学部 | 工学研究科<br>融合科学研究科<br>環境リモートセンシング研究センター | ○ | ○ | 2012 |
| | 3 | ウダヤナ大学<br>大学院プログラム | 融合理工学府<br>環境リモートセンシング研究センター | ○ | ○ | 2012 |
| | 4 | ガジャマダ大学<br>地理学部 | 融合理工学府<br>環境リモートセンシング研究センター | ○ | ○ | 2012 |
| | 5 | ハサヌディン大学<br>工学部 | 融合理工学府<br>環境リモートセンシング研究センター | ○ | ○ | 2012 |
| | 6 | パジャジャラン大学<br>数学・自然科学学部、農学部、農業工学部、地質工学部、大学院 | 融合理工学府<br>園芸学研究科<br>環境リモートセンシング研究センター<br>環境健康フィールド科学センター | ○ | ○ | 2012 |
| | 7 | バンドン工科大学<br>地球工学部 | 融合理工学府<br>環境リモートセンシング研究センター | ○ | ○ | 2012 |
| 韓国 | 8 | 延世大学校<br>人文芸術大学大学院 | 融合理工学府 | ○ | | 2018 |
| タイ | 9 | マヒドン大学<br>理学部、大学院 | 園芸学研究科 | ○ | ○ | M 2016<br>D 2008 |
| | 10 | シルパコーン大学<br>薬学部 | 医学薬学府 | | ○ | 2012 |
| | 11 | キングモンクット工科大学トンブリ校<br>生物資源工学研究科 | 園芸学研究科 | | ○ | 2014 |
| | 12 | マヒドン大学<br>薬学部、大学院 | 医学薬学府 | | ○ | 2014 |
| | 13 | タマサート大学<br>シリントーン国際工学部 | 工学研究科 | | ○ | 2016 |
| | 14 | メーファールアン大学<br>農工学部 | 園芸学研究科 | ○ | ○ | M 2016<br>D 2019 |
| | 15 | チェンマイ大学<br>薬学部 | 医学薬学府 | | ○ | 2017 |
| | 16 | マヒドン大学<br>カンチャナブリキャンパス・大学院 | 園芸学研究科 | ○ | | 2021 |

| 国名 | No. | 相手先大学名・部局名 | 千葉大学部局名 | 学位 | | 協定締結年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 修士 | 博士 | |
| 台湾 | 17 | 国立陽明交通大学<br>理学院 | 融合理工学府 | | ○ | 2019 |
| 中国 | 18 | 清華大学<br>建築学院 | 園芸学研究科 | ○ | | 2008 |
| | 19 | 上海交通大学研究生院<br>船舶海洋建築工学院、生物医学工程学院、電子情報電気工程学院 | 工学研究科 | | ○ | 2009 |
| | 20 | 南京農業大学<br>園芸学院 | 園芸学研究科 | ○ | | 2015 |
| | 21 | 南京芸術学院<br>工業デザイン学院 | 工学研究科 | ○ | | 2016 |
| | 22 | 北京林業大学<br>園林学院 | 園芸学研究科 | ○ | | 2016 |
| | 23 | 浙江大学<br>コンピュータサイエンス学院 | 融合理工学府 | ○ | | 2017 |
| | 24 | 浙江工商大学<br>東方語言文化学院 | 人文公共学府 | ○ | | 2017 |
| | 25 | 広州美術学院 | 融合理工学府 | ○ | | 2019 |
| ドイツ | 26 | ケルン応用科学大学<br>文化科学研究科 | 融合理工学府 | ○ | | 2017 |

また、5つの研究科などで合計11の英語による教育プログラムを実施している。

| 研究科等 | 課程 | プログラム名 | 開始年度 |
|---|---|---|---|
| 人文公共学府 | 博士前期課程 | Economics in English コース | 平成 29 年度 |
| 融合理工学府 | 博士前期課程<br>博士後期課程 | MADE プログラム（Master of Asia Design Education Program） | 平成 25 年度 |
| 融合理工学府 | 博士前期課程<br>博士後期課程 | PULI Program（Post Urban Living Innovation Program） | 平成 26 年度 |
| 融合理工学府 | 博士前期課程<br>博士後期課程 | CAPE Program（Campus Asia Plant & Environment Innovation Program） | 平成 28 年度 |
| 融合理工学府 | 博士前期課程<br>博士後期課程 | CODE プログラム（Continents Design Education Program） | 平成 23 年度 |
| 融合理工学府 | 博士前期課程<br>博士後期課程 | イノベーション・デザイン・スクール・プログラム | 令和 3 年度 |

| 研究科等 | 課程 | プログラム名 | 開始年度 |
|---|---|---|---|
| 融合理工学府 | 博士前期課程<br>博士後期課程 | FARM Program（Future Agriculture with Far east Russia Pre-Master to PhD Program） | 平成 29 年度 |
| 園芸学研究科 | 博士前期課程<br>博士後期課程 | 環境園芸学国際プログラム | 平成 20 年度 |
| 医学薬学府 | 4 年博士課程 | 先進医学薬学国際プログラム | 平成 23 年度 |
| 看護学研究科 | 博士前期課程 | 国際プログラム | 平成 24 年度 |
| 看護学研究科 | 博士後期課程 | 国際プログラム | 平成 26 年度 |

## ④取組の実績　【4ページ以内】

○全学教育の面では、グローバル人材育成の一環として、平成25年度より「国際日本学」と呼ばれる科目群を設定し、留学生と協働して学ぶ科目を多数設定したほか、海外の協定校の学生と特定の課題について協働で学ぶPBL型の短期プログラム「グローバル・スタディ・プログラム」(GSP)を開始し、アメリカ、マレーシア、フィンランド、ベトナム、ギリシャ及びドイツの協定大学の学生との協働学習を推進するなど、国際的な教育環境の構築に努めている。
なお、2020年度・2021年度については新型コロナの影響により実施していない。

【グローバル・スタディ・プログラム実績】

| 大学名 | 2011年度 | | 2012年度 | | 2013年度 | | 2014年度 | | 2015年度 | | 2016年度 | | 2017年度 | | 2018年度 | | 2019年度 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 本学から | 先方から | 本学から | 先方から | 本学から | 先方から | 本学から | 先方から | 本学から | 先方から | 本学から | 先方から | 本学から | 先方から | 本学から | 先方から | 本学から | 先方から |
| フィンランド・セイナヨキ応用科学大学(派遣) | 10 | 9 | | | 13 | 8 | | | 14 | 7 | | | 15 | 13 | | | | |
| ベトナム・ノンラム大学(派遣) | | | | | 11 | 11 | | | | | | | | | | | | |
| マレーシア・マラヤ大学(派遣) | | | | | 14 | 0 | | | | | | | | | | | | |
| ギリシャ・アリストテレス大学(派遣) | | | | | | | 13 | 14 | | | 17 | 14 | | | | | | |
| マレーシア・マルチメディア大学(派遣) | | | | | | | 13 | 14 | | | 8 | 5 | | | 6 | 5 | | |
| ドイツ・ドレスデン応用科学大学(派遣) | | | | | | | | | | | 20 | 12 | | | 19 | 10 | 13 | 12 |
| アメリカ・シンシナティ大学((派遣) | | | | | | | | | | | | | | | 16 | 16 | | |
| フィンランド・セイナヨキ応用科学大学(受入) | | | 15 | 14 | | | 12 | 15 | | | 12 | 16 | | | 5 | 12 | | |
| ギリシャ・アリストテレス大学(受入) | | | | | | | | | 13 | 15 | | | 11 | 13 | | | | |
| マレーシア・マルチメディア大学(受入) | | | | | | | | | 15 | 15 | | | 4 | 10 | | | | |
| ドイツ・ドレスデン応用科学大学(受入) | | | | | | | | | | | | | 11 | 14 | | | | |
| 計 | 10 | 9 | 15 | 14 | 38 | 19 | 38 | 43 | 42 | 37 | 57 | 47 | 41 | 50 | 46 | 43 | 13 | 12 |

○本学は外国人教員の雇用を積極的に進めており、令和3年5月1日現在で158名の教員（全教員（特任教員及び非常勤講師含む）の6.0%）が在籍している。国際的な教育研究の経験を有する日本人教員については、令和3年5月1日現在で53名の常勤教員が、海外の大学で学位を取得している（常勤教員（1,324名）の4.0%）。

教員の国際公募については、全学的に統一した制度を導入してはないが、一部の学部・研究科において実施されており、公募情報を英文により学外ホームページに掲載している。また、年俸制については、令和3年5月1日現在463名に適用している。今後、令和5年度までに521名（総教員数の38.6%程度）を目標に対象者を広げていく予定である。

テニュアトラック制については、平成20年度に生命系科学分野に限定して導入し、平成22年度には大学自主取組の制度として全学規程に定め導入した。令和2年度までに51名がテニュアトラック教員として雇用された。

FD活動に関しては、全学レベル、部局レベルの双方で様々な分野のFD活動を活発に実施しており、その中で国際化に関するものは、平成25年度は6件、平成26年度は2件、平成27年度は3件、平成28年度は2件、平成29年度は5件、平成30年度は2件、平成31年度は3件実施された。

【国際化に対応するFD実施状況一覧】

| 年度 | FD種別 | テーマ | 参加人数 |
|---|---|---|---|
| H25 | 融合科学研究科FD | 情報科学専攻での国際学生ワークショップの活動報告 | 30名 |
| H25 | 教育学部FD | 「平成25年度教育学部・教育学研究科FD研修会」(ツインクルプログラム | 103名 |
| H25 | 文学部FD | 留学生チューターへの研修 | 12名 |
| H25 | 普遍教育FD<br>全学FD | 「グローバルインターンシップ・ボランティアの現状と課題」 | 25名 |
| H25 | 工学部・工学研究科<br>融合科学研究科FD | 米国留学体験記 | 20名 |
| H25 | 全学FD | スキップワイズプログラム国際FD | 14名 |
| H26 | 文学部・法政経学部FD | 留学生チューターへの研修 | 12名 |
| H26 | 全学FD | スキップワイズプログラム国際FD | 18名 |
| H27 | 工学部・工学研究科<br>融合科学研究科FD | 米国の教育事情に関する研修 | 19名 |
| H27 | 理学部・理学研究科FD | 留学生の英語論文指導に関する研修 | 14名 |
| H27 | 全学FD | スキップワイズプログラム国際FD | 16名 |
| H28 | 全学FD | TOEIC S&W Propellワークショップ | 5名 |
| H28 | 全学FD | スキップワイズプログラム教員向け英語研修 | 27名 |

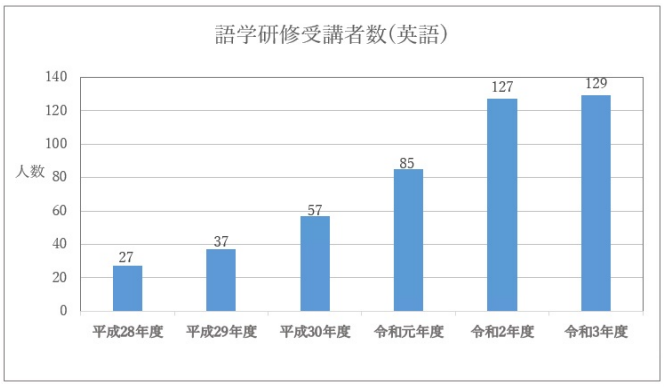
| 年度 | FD種別 | テーマ | 参加人数 |
|---|---|---|---|
| H29 | 国際教養学部FD | 学生の留学指導に関わる専任教員の研修(1) | 27名 |
| H29 | 国際教養学部FD | 学生の留学指導に関わる専任教員の研修(2) | 31名 |
| H29 | 看護学部・看護学研究科FD | 英語による講義やプレゼンテーションセミナー | 12名 |
| H29 | 全学FD | 英語授業を行うための教員向け英語講義実践研修(第1回) | 21名 |
| H29 | 全学FD | 英語授業を行うための教員向け英語講義実践研修(第2回) | 24名 |
| H30 | 全学FD | 英語授業を行うための教員向け英語講義実践研修(第1回) | 13名 |
| H30 | 全学FD | 英語授業を行うための教員向け英語講義実践研修(第2回) | 10名 |
| H31(R1) | 全学FD | スキップワイズプログラム教員向け英語研修 (夏季・集合型) | 1名 |
| H31(R1) | 全学FD | スキップワイズプログラム教員向け英語研修 (夏季・e-learning型) | 5名 |
| H31(R1) | 全学FD | スキップワイズプログラム教員向け英語研修 (春季・e-learning型) | 17名 |
| R2 | 全学FD | スキップワイズプログラム教員向け英語研修 (夏季・e-learning型) | 19名 |
| R2 | 全学FD | スキップワイズプログラム教員向け英語研修 (春季・e-learning型) | 14名 |
| R2 | 全学FD | スキップワイズプログラム教員向け英語研修 (集合型) | 3名 |
| R3 | 全学FD | グローバル教育・研究を担う教員のための英会話基礎力向上プログラム(e-learning型) | 32名 |
| R3 | 全学FD | 英語で授業を行う教員のための実践力向上プログラム (集合型) | 10名 |

## ④取組の実績　【4ページ以内】

○事務体制の国際化については、従前より海外大学等との協定締結等を担当する部署として国際企画課を、本学学生の留学支援・推進及び海外大学からの留学生受入れ等を担当する部署として留学生課をそれぞれ設置していたが、国際的競争力強化のため事務組織の見直しを図り、令和元年７月から両課を統括する国際統括役を配置し、事務体制を強化した。また，平成22年度から留学生窓口のワンストップ化を実現するため、インターナショナル・サポートデスク（ISD）を西千葉、亥鼻及び松戸キャンパスに設置し、各1名を配置している。更に、英語のできる国際担当職員として、任期付きの特任専門職員として雇用していた者を承継職員として登用し、国際化業務の体制強化を図っている。

令和2年度から実施する千葉大学グローバル人材育成「ENGINE」を推進するため、令和元年度からグローバル人材枠での採用試験を実施している。令和3年度は一定の職務経験があり、即戦力となりうる者を選抜する「社会人枠採用試験」と併せて実施、海外大学での勤務経験がある者1名を採用し、教育研究支援体制の更なる充実・強化を図っている。

海外の大学との交流、外国人研究者、留学生への対応を担う事務スタッフの質的向上、量的拡大を図ることを目的として、令和３年度は、語学学校を活用した語学研修（英語）、語学検定試験（TOEIC-IP 試験等）を実施し、職員の語学力の向上に努めた。また、令和元年度には海外派遣研修を実施し、長期研修ではモンタナ州立大学・ポートランド州立大学（アメリカ）に1名派遣し、短期研修ではインドネシア大学（インドネシア）に1名、ニューサウスウェールズ大学（オーストラリア）に３名を派遣するなど、海外の大学との交流を通じて、グローバル化に対応する職員の育成に取り組んだ。新型コロナウイルスの影響により、令和２、３年度は海外派遣研修は実施を見合わせたが、令和３年度は提携校のマヒドン大学インターナショナルカレッジと千葉大学共催による留学生課SD研修をオンラインにて実施するなど、事務体制の国際化を促進している。




●海外派遣研修（短期）受講者

| 年度 | 派遣先 | 人数 |
|---|---|---|
| 平成 28 年度 | オーストラリア | 2名 |
| | タイ | 4名 |
| 平成 29 年度 | タイ | 2名 |
| | オーストラリア | 3名 |
| 平成 30 年度 | 韓国 | 1名 |
| | オーストラリア | 3名 |
| | イギリス | 1名 |
| 令和元年度 | インドネシア | 1名 |
| | オーストラリア | 3名 |

＊派遣期間は概ね 10 日間程度

○成績管理については、GPA制度を導入することにより、学生に対するきめ細やかな履修指導、学生自身による学習習熟度の把握等に活用している。また、一部の学部・学科では、合わせて履修可能な上限単位の設定を行い、早期卒業制度を導入している。このほか、各学部ごとに成績評価基準を定め、基準に則った成績評価を実施している。

シラバスに各回の授業内容、目標、評価方法・基準等を記載し、WEBで公開する等の方法で学生に周知徹底を図ることで、体系的な学習指導に役立てている。また、教育の質を保証するとともに、学生の立場に立った教育課程の体系化を進める仕組みとして、平成27年度には「コース・ナンバリング・システム」、及び「カリキュラムツリー」を、令和元年度には「カリキュラムマップ」を全学的に導入し、各学部ごとに整備した。

これらに加え、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを全学単位及び各学部・研究科単位で作成し、教育課程の内容、卒業・修了時の到達目標を設定することで、教育内容の質の確保を行っており、策定後の見直しとして、平成28年3月に中教審から示されたガイドラインをもとに全学的に点検・見直しを行ったほか、令和元年度に行った本学の教育改革（ENGINEプログラム）に実施に合わせ、ディプロマ・ポリシー及び、カリキュラム・ポリシーについて、全学的な見直しを行い、令和２年度にアドミッション・ポリシーの見直しを行った。今後も、学内における教育課程等の改革等に合わせ、各ポリシーの関連性や一貫性が確保されるよう、適宜、見直しを行う。

⑤事業の評価 【1事業ごとに1ページ以内】

## 大学の世界展開力強化事業（平成２８年度採択）事後評価結果

| | |
|---|---|
| 大 学 名 | 千葉大学 |
| 整理番号 | A②-1 |
| 事 業 名 | 植物環境イノベーション・プログラム |

◇大学の世界展開力強化事業プログラム委員会における評価

| 総括評価 | |
|---|---|
| A⁻ | 一部でやや不十分な点はあるものの、概ね事業計画どおりの成果をあげており、事業目的は実現されたと判断された。 |

コメント

本事業は、千葉大学（園芸学部及び大学院、工学部及び大学院、国際教養学部等）、中国・浙江大学（コンピュータサイエンス学院）、清華大学、韓国・延世大学校（人文芸術学院）との共同で実施された。都市農業・都市緑化において、サービス・デザインの手法を取り入れ、都市の農業や緑化において、施設園芸・植物栽培環境プログラムにデザイン・イノベーション・プログラム、食品流通経済、都市公園政策等、農業の６次＋４次産業を担う人材育成を目指したものである。

事業展開では、実践型として38種のプログラムの実施と修士課程17科目を開講し、当初の計画を大きく上回っていることから、SDGsの取組に直結する人材育成が期待される。また、本プログラムが契機となり、研究＋実践型人材育成プログラムには日中韓で30 以上の大学が参加し、新産業創造のリーダー的存在である中国及び韓国の大企業のワークショップには1,400名を超す学生が参加する等、注目度が高い点は評価できる。

一方で、単位取得を伴う交流期間3か月以上の交流を行う学生数という点においては、当初の計画に比し、派遣及び受入学生の割合は極めて低く、ダブルディグリー（DD）も同様に少なく、学生への実質的な教育効果の検証が必要である。また、本事業における植物工場にかかる経費と、プログラムの理念、講義科目、実践プログラム科目の割合のバランスに齟齬がみられ、植物研究とデザイン研究の融合についての目的が明確になっているとは言えない。プログラムの理念はユニークで優れているものの、本事業の更なる実現と発展に向け、具体的なビジョンや財源確保等について引き続き努力が望まれる。

最後に、大学の世界展開力強化事業による補助期間は終了したが、引き続き質保証を伴う発展的な事業展開の実施によって、我が国の大学教育を牽引し、更なるグローバル展開力の強化に寄与されることに期待する。

⑤事業の評価 【1事業ごとに1ページ以内】

# 大学の世界展開力強化事業（令和元年度選定）中間評価結果

| | |
|---|---|
| 大 学 名 | ○豊橋技術科学大学、宇都宮大学、千葉大学 |
| 整理番号 | 2 |
| 事 業 名 | 近未来クロスリアリティ技術を牽引する光イメージング情報学国際修士プログラム |

大学の世界展開力強化事業プログラム委員会における評価

| | |
|---|---|
| （総括評価）<br>A | これまでの取組を継続することによって、事業目的を達成することが可能と判断される。 |

（コメント）

本事業は、クロスリアリティという先端技術をテーマにしたプログラムであり、ヨーロッパにおける industry4.0 そして日本における Society 5.0 を見据えつつ、人間の知識、経験、能力を強化する XR をそれぞれの大学が持つ強みを連動させ、日 EU 双方に寄与する実践的なカリキュラムを実施している。

プログラムの運営にかかわる AMB と QAB のもとで QASPH というハンドブックを明文化した取組や、豊橋技術科学大学の学生のために学則改正を行い、本プログラム参加者の標準修業年限を 2 年 6 ヶ月として参加しやすい環境を整備した点は評価できる。また、渡航支援については世界展開力推進室の専任スタッフが行い、受入学生の支援に関しては、他の留学生と同様の支援体制を提供するとともに、在籍学生をサポーターとして配置し、学生 1 名に教員 1 名を指導教員として配置している点も評価できる。アジア諸国との連携でも一定の実績をあげているとのことから、その実績を十分に活用しつつ、本事業の今後の展開に繋げていただきたい。

一方で、4 大学がマルチディグリーを発行する意義、この学位を取得する学生のメリットが分かりづらい。また、アソシエートパートナーである千葉大学と宇都宮大学の果たす役割が明確でなく、国内連携大学との間で、プログラムをさらに発展させるという意図があまり見られない。さらに具体的なインターン事例についての説明も不十分であったため、その詳細な説明と、グッドプラクティスの学内・学外への共有が強く望まれる。

最後に、今後も本事業終了後の継続的な実施を見据えた事業計画の策定と安定的な財源確保に努め、学内及び関係機関との質保証を伴う国際教育連携の推進とともに、将来の我が国と相手国の大学間交流の更なる促進と発展に向け、引き続き積極的な事業展開に取り組まれることを期待する。

（大学名： 千葉大学 ）（主な交流先： 英国・インド・オーストラリア ）

| 大学等名 | 千葉大学 |
|---|---|

**⑥他の公的資金との重複状況**　【2ページ以内】

【卓越大学院プログラム】
○アジアユーラシア・グローバルリーダー養成のための臨床人文学教育プログラム（令和元～７年度）
「課題先進地域」としてのアジアユーラシア多言語多文化理解、アジアユーラシアと人文学の対象に向けてローカライズされた分析のデータサイエンス（Digital Humanities 2.0）の二つの技法を統合的に修得することにより、しなやかな文化的想像力と文理融合的な俯瞰的学知を兼ね備えた人材養成を行っていくことはもちろん、本学における大学院改革を先導し、さらには波及的に我が国の人文社会系大学院自体の改革を促していく。

○革新医療創生CHIBA卓越大学院（令和元～７年度）
国内外の一流研究機関及び国内企業と連携し、新しい大学院教育「クラスター制CHIBA教育システム」の下、様々な分野のトップの大学院生が、既成の枠を越えて組織された６つの教育研究クラスターの複数クラスターで学修し、複数の分野で主専攻とサブ専攻を修め、俯瞰力と多角的な視点、柔軟な思考、イノベーションマインド、失敗を恐れないスピリッツとレジリエンスを有し世界を先導する革新医療創生のイノベーターを育成する。

【課題解決型高度医療人材養成プログラム】
○メンタル・サポート医療人とプロの連携養成（平成30～令和４年度）
軽症の不眠、不安、うつ、認知症、依存症等を持つ患者および家族に、医師、歯科医師、看護師、薬剤師、コメディカル等が簡易（低強度）認知行動療法的な相談支援を行うメンタルサポート医療人養成をオンライン授業やネット教材を活用して行う。同時に、精神科医が難治性精神疾患や司法精神保健、ギャンブル依存に対して適切な診断と薬物治療を提供できるメンタルプロフェッショナル養成を行う。

【知識集約型社会を支える人材育成事業】
○インテンシブ・イシュー教育プログラムのモデル展開（令和３～令和６年度）
本事業は、課題から考えかつ、その課題を深めるために、横断する学問領域の教員による連携的かつ集約的なタームと、野外実習・実験、インターン、留学等、学外での学びを個々の学生がカスタマイズしやすいセルフデザインギャップタームを組み合わせたカリキュラムの構築を目的とする。連携的かつ集約的なタームにおいて専門的な知識・技術を学び、セルフデザインギャップタームにおいて学外で学びを深める、メリハリのある課題解決型のカリキュラム運営を構築する。

【ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業】
○未定（令和４～令和10年度）

| 大学等名 | 千葉大学 |
|---|---|

**⑥他の公的資金との重複状況**　【2ページ以内】

【大学の世界展開力強化事業】

○「極東ロシアの未来農業に貢献できる領域横断型人材育成プログラム（FARM)」（平成29～令和３年度）
我が国最大規模の植物工場を有する千葉大学環境健康フィールド科学センターを中心に、未来農業ビジネスの一つで先進型園芸施設である、人工光型植物工場、太陽光利用型植物工場の計画、生産から販売までのマネジメントに関わるプロフェッショナルな人材を日本とロシアが共同して育成する。

○「COIL を使用した日米ユニーク・プログラム（JUSU)」（平成30～令和４年度）
千葉大学と米国4大学の特色や強みを活かしたユニークな分野で、オンラインを活用しながら、アクティブラーニング型講義を展開し、日米の学生が各専門分野を教え合う双方向共同教育を行うことで、自分の専門にとらわれることのない学びを実現できる人材を育成する。
COIL：オンライン国際協働学習

○「ソーシャル・デザイン・イニシアティブ（SDI-A）」（令和３～令和７年度）
日中韓+ASEAN地域をフィールドに、社会が抱えるさまざまな課題に対し、実際に現地に赴きその問題を理解し、多様で俯瞰的な解決策を提案することを繰り返すことにより、デザイン思考により課題解決することができるソーシャル・デザイン・イニシアティブ(SDI)人材を育成する。

【スーパーグローバル大学等事業】
○「グローバル千葉大学の新生－Rising Chiba University－」（平成26～令和５年度）
グローバル人材に必要とされる「人間力」として、「俯瞰力」、「発見力」、そして「実践力」を取り上げ、それらの育成に特化した教育プログラムを新たに準備し、さらに、これらの人間力の育成を各学生にテーラーメードで行うために、SULA（Super University Learning Administrator）という新しい教育人材を配置する。このような人間力を身に付けたグローバル人材の育成に向けて、千葉大学を新生させる覚悟で改革を進める。

　令和４年度海外留学支援制度（協定派遣・協定受入）に採択されたプログラムのうち、本事業の申請内容と関連性のあるものはない。